

第三百十四條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡
 スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ及ヒ決
 定ヲ完結スル期日ヲ定ム此期日ノ定メナキ
 トキハ受命判事之ヲ定ム受命判事其委任ヲ
 施行スルニ差支アルトキハ裁判長他ノ職員
 ヲ指名ス

第三百十五條 準備手續ニ於テハ左ノ諸件ヲ
 調書ヲ以テ明確ニス

- 第一 如何ナル請求ヲ起スマヤ及ヒ如何ナル
 攻撃及ヒ防禦方法ヲ主張スルヤ
- 第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃及
 ヒ防禦方法カ争ヒトナルヤ又ハ争ヒト
 ナラサルヤ

第三 争ト爲リタル請求及ヒ争ト爲リタ

ル攻撃及ヒ防禦ノ方法ニ付テハ其事實
 上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據
 方法主張シタル證據抗辯證據方法并ニ
 證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提
 出シタル申立

其訴訟手續ハ訴訟カ區裁判所ニ繫屬スルト
 キ適用スヘキ規定ニ從テ其手續ハ訴訟其物
 又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ
 熟シタリト認ルマテ之ヲ續行ス

第三百十六條 當事者ノ一方カ期日ニ受命判
 事ノ面前ニ出頭セサルトキ受命判事ハ出頭
 シタル當事者ノ提供ヲ前條ノ規定ニ依リ調
 書ヲ以テ明確ニシ且新期日ヲ定ム出頭セサ
 ル當事者ニ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言
 渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定
 施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ
 定メサルキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事
 其委任ヲ施行スルニ差支アルキハ裁判長更
 ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以
 テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

- 第一 如何ナル請求ヲ爲スマヤ及ヒ如何ナル
 攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ
- 第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、
 防禦ノ方法ヲ争フヤ又ハ之ヲ争ハサル
 ヤ

第三 争ト爲リタル請求及ヒ争ト爲リタ

ル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其事實上
 ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方
 法、主張シタル證據抗辯、證據方法並
 ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ
 提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴
 訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ
 之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於
 テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルキハ受命判
 事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタ
 ル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期
 日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調

之ヲ呼出ス

當事者新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達
セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張
ハ之ヲ明白セラレタルモノト看做シ其主張
ニ付テノ準備手續ハ復之ヲ續行スルコトヲ
得ス

第三百十七條 準備手續ノ終結後受訴裁判所
ノ口頭辯論ノ期日ハ職權ヲ以テ之ヲ定メ當
事者ニ通知セサル可カラズ

第三百十八條 口頭辯論ノ際當事者ハ調書ニ
基キ準備手續ノ結果ヲ演述セサル可ラス
當事者ノ一方出頭セサルトキハ準備手續ニ
於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完
結ス其他ニ付テハ申立ニ因リ關席判決ヲ言

渡ス

第三百十九條 受命判事ノ面前ニ於テ事實證
書又ハ宣誓要求ニ付キ陳述ヲ爲サヌ又ハ之
ヲ拒ミタルトキハ口頭辯論ニ於テ復之ヲ追
完スルコトヲ得ス受命判事ノ面前ニ出頭シ
タル當事者ノ陳述ヲナサハルモノト看做ス
ヘキハ判事ヨリ陳述ヲナスヘキコトヲ促カ
サレタル部分ニ限ル
受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニセサル請求攻
撃及防禦方法證據抗辯ハ後日ニ至リ始メテ
生シ又ハ當事者ノ知リタルコトヲ説明スル
トキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコ
トヲ得

第五節 證據調ノ總則

書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可
シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサル
キハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實
上ノ主張ヲ明白シヌリト看做シ其主張ニ付
テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結
後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通
知ス可シ

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準
備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ
原告若クハ被告カ出頭セサルキハ準備手
續ニ於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之
ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リ關席判決

ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確
ニヌ可キ事實又ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サヌ
又ハ拒ミタルキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完
スルコトヲ得ス
請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及
ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之
ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始
メテ原告若クハ被告ノ知リタルコトヲ説明ス
ルキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコ
トヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百二十條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲ス證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名又ハ他ノ裁判所ニ之ヲ委任ス證據調ノ方法ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ通例トス
證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルヲ得
此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム
當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ (獨(三三三三))

第二百二十一條 證據調ニ付キ不定時間ノ障礙アルトキハ申立ニ因リ期間ヲ定ム其期間空ク滿了シタル後ハ訴訟手續ヲ遲滯セサルトキニ限リ其調據方法ヲ用サルコトヲ得
第二百二十二條 原被告ニハ證據調ニ陪席スルコトヲ許ス

第二百二十三條 證據調ニ付キ別段ノ訴訟手續ヲ要スルトキハ其手續ハ證據決定ヲ以テ之ヲ命ス (日、二七四第二項)

第二百二十四條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲グ
第一 立證ス可キ係爭事實ノ表示
第二 證據方法ノ表示即チ訊問セラルヘキ證人及ヒ鑑定人ノ指名

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障礙アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滯セシメサル限リハ其證據方法ヲ用サルヲ得

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲グ可シ
第一 證ス可キ係爭事實ノ表示
第二 證據方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キハ其表示

第三 事實上主張ノ證明又ハ辨駁ノ爲メ
證據方法ヲ申出テタル當事者ノ表示

第四 要求セラレ又ハ反對ニ要求セラレ

タル宣誓ヲナサシムルコトヲ命スルト
キハ其誓文

第三百二十五條 證據決定ノ完結前ニハ當事
者ハ前辯論ニ基キ其決定ノ變更ヲ申立ルコ
トヲ得ス

第三百二十六條 受訴裁判所ノ部員カ證據調
ヲ爲ス可キトキハ證據決定ヲ言渡スノ際裁
判長ハ受命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ
定ム

其期日ノ定メナキトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ
裁判長他ノ部員ヲ指名ス

第三百二十七條 他ノ裁判所カ證據調ヲ爲ス
ヘキトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス
證據調ニ關スル審問書ハ受託判事ヨリ受訴
裁判所ノ書記ニ原本ヲ以テ之ヲ送致シ裁判
所書記ハ之ヲ受領シタルコトヲ當事者ニ通
知ス

第三百二十八條 外國ニ於テ證據調ヲ爲ヌヘ
キトキハ裁判長ハ管轄官廳ニ證據調ヲ囑託
ス獨逸領事證據調ヲ爲シ得ルトキハ之ニ囑
託ス

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ
被告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ
施行完結前ニ在テ新ナル辯論ニ基クキニ限
リ之ヲ申立ツルヲ得

第二百七十八條 受訴裁判所ノ部員カ證據調
ヲ爲ス可キトキハ裁判長證據決定言渡ノ際受
命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ
其期日ヲ定メサルキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁

判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ
爲ヌ可キトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ
證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事
ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ
之ヲ受領シタルコトヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事カ證據
調ノ期日ヲ定メタルキハ其期日及ヒ場所ヲ
當事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條 外國ニ於テ爲ヌ可キ證據調
ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公
使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ヌ其囑託ニ
付テハ第五百五十二條及ヒ第五百五十五條ノ規

第三百二十九條 外國官廳カ證據調ヲ囑託セ

ラルトキハ裁判所ハ舉證者ニ於テ囑託書ヲ送致シ且其囑託ノ完結ヲ致スヘキコトヲ命ヌルヲ得

裁判所ハ其命ヲ舉證者カ證據調ニ付キ外國ノ法律ニ適ヌル公正證書ヲ提出スヘキコトニ限ルヲ得

前二項ノ場合ニ於テハ證據決定ヲ以テ舉證者ニ於テ證書ヲ裁判所書記課ニ納付スヘキ期間ヲ定ム此期間ノ空ク滿了シタル後ハ訴訟手續ヲ遲滯セサルトキニ限り其證書ヲ用井ルコトヲ得

舉證者ハ相手方カ其權利ヲ相當ナル方法ヲ以テ實行スルコトヲ得ル爲メ成ル可ク證據

調ノ地ト時トヲ適當ノ時間ニ相手方ニ通知セサル可ラス其通知ナキトキ裁判所ハ舉證者ニ於テ證據審問書ヲ使用スルノ權アルヤ否及ヒ其程度ヲ考定ス

第三百三十條 受命判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ至當ト認ルノ原因カ爾後ニ生スルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルノ權アリ此處分ハ之ヲ當事者ニ通知セサル可ラス

第三百三十一條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ争ヲ生シ其争ノ完結ニ證據調ノ續行カ關係シ(完結セサレハ續行スヘカラサルヲ云フ)且其判事之ヲ裁判スルノ權ナキトキハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ

定ヲ準用ス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルヲ得此囑託ヲ爲シタルキハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ争ヲ生シ其争ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルヲ得ス且其判事之ヲ裁判スルノ權ナキキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

完結ス

其中間訴訟ニ付テノ口頭辯論ノ期日ハ職權ヲ以テ之ヲ定メ且當事者ニ通知セサル可ラズ

第三百三十二條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキト雖證據調ハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得可キ限リハ之ヲ爲ス後日ノ證據調又ハ證據調ノ補充ハ訴訟手續ヲ遲滯セサルトキ又ハ當事者カ過失ナクシテ前期日ニ出頭スルコト能ハサリシコトヲ疏明スルトキ及ヒ補充申立ノ場合ニ於テハ一方ノ出頭セサルカ爲メ證據調ノ重大ナル不完全ヲ生セシコトヲ疏明スルトキ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ申立

ニ因リ之ヲ命ス

第三百三十三條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日カ必要ナルトキハ舉證者又ハ當事者雙方カ前期日ニ出頭セサリシトキト雖職權ヲ以テ之ヲ定ム

第三百三十四條 外國官廳ノナシタル證據調カ受訴裁判所ノ(國ノ)現行法ニ適スルトキハ外國法律ニ照シ不完全ナル所アルモ異議ヲ申立ルコトヲ得ヌ

第三百三十五條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ之ヲ爲ヌ期日ハ同時ニ口頭辯論續行ノ期日ト定ム

第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲メニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルキニ限リ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

第二百八十五條 裁判所ハ事件ノ未ダ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

第二百八十六條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムルノ必要アルキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十七條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スルハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スルノ期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調
ヲ爲スヘキコトヲ命スル證據決定ヲ以テ同
時ニ受訴裁判所ニ於テナヌ口頭辯論續行ノ
期日ヲ定ルコトヲ得之ヲ定メサルトキハ證
據調終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當
事者ニ通知ス

第六節 檢証

第三百三十六條 (日、第三百五十七條ニ對比
ス)

第三百三十七條 (日、第三百五十八條ニ對比
ス)

(第三百四十四條) 裁判所ハ舉證者證人ノ訊
問ニ因テ生スル費用ニ付キ國庫ニ辨償ノ爲
メ豫納金ヲ供託スルニ非サレハ呼出ヲ爲サ
ハルコトヲ得

一定期間内ニ供託ヲ爲サ、ルトキハ其後適
當ノ時ニ供託ヲ爲シ訴訟手續ノ遅延ナリシ
テ訊問ヲ爲スコトヲ得セシムルニアラサレ
ハ呼出ヲ爲サス

第七節 人證

第三百三十八條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ
及ヒ證人ヲ訊問スヘキ事實ヲ表示シテ之ヲ
爲ヌ(日、二九一)

第三百三十九條 證據決定ヲ言渡シタル後之
ニ職セタル爭ノ事實ニ付キ指名スル新證人
ノ訊問ハ其訊問ニ依リ訴訟ノ完結ヲ遅滞シ
且裁判所カ當事者ハ訴訟ヲ遷延スルノ故意
ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ證人ヲ以前ニ

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調
ヲ爲ス可キコトヲ命シタルトキハ受訴裁判所ハ
證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ
定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調
ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事
者ニ通知ス可シ

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期
間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期
間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期

間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續
ノ遅滞ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

第六節 人證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ
規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於
テ證言スルノ義務アリ

指名セザリシコトノ必證ヲ得ルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下ス(日、二二〇参照)

第三百四十條 (日、三百十八條ニ對比ス)

第三百四十一條 官吏ハ已ニ其職ニ在ラサルトキト雖其職務上黙秘ノ義務アル事情ニ付テハ其所屬官廳ノ許可ヲ得ルニアラサレハ證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得ヌ獨逸宰相ニアリテハ皇帝、宰相ニアリテハ各邦君主、共和市府元老議官ニアリテハ其院ノ許可ヲ要ス

其許可ハ證言カ獨逸國又ハ各邦ノ安寧ニ妨害ヲ加フヘキトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ通知ス

第三百四十二條 證人ノ呼出狀ハ裁判所書記

證據決定ヲ參酌シテ之ヲ作り且職權ヲ以テ之ヲ送達ス

喚出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者ノ表示

第二 訊問スヘキ事實

第三 時及ヒ場所ヲ以テ指示シタル期日

ニ證言ヲナス爲メ出頭スヘキコトノ命令并ニ此法律ニ定メタル不參ノ罰

第三百四十三條 陸軍現役若クハ海軍現役ノ

軍人ヲ證人トシテ呼出スニハ軍事官廳ニ囑

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上黙秘ス可キ義務アル情況ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スルノ恐れルキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ

及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ヌ(獨、三三八)

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件

ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 證人及ヒ當事者ノ表示

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス

可キ事實ノ表示

第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ期日

第四 出頭セサルキハ法律ニ依リ處罰ス

可キ旨

第五 裁判所ノ名稱(獨、三四二第二項)

第二百九十三條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサ

ル軍人、軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所

託シテ之ヲ爲ス

第三百四十四條 (日、二百八十八條ニ對比ス)

屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲メニ其呼出ヲ受ケタル者ノ闕勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムルノ求ヲ爲スノ義務アリ

第三百四十五條 合式ニ呼出サレテ出頭セザ

ル證人ニハ申立ヲ要スルコトナクシテ其不

參ニ因リ生シタル費用并ニ三百「マルク」以

下ノ罰金且其罰金ヲ徴取スルコト能ハサル

トキハ六週以内ノ拘留ヲ言渡ス

再度不參ノ場合ニ於テハ更ラニ其罰ヲ言渡

シ亦證人ノ勾引ヲ命スルコトヲ得

此決定ニ對シテハ抗告ヲ許ス

第三百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ
證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

陸軍現役若クハ海軍現役ノ軍人軍屬ニ對スル罰ノ確定及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス其軍人軍屬ノ勾引ハ軍事官廳ニ囑託シテ之ヲ爲ス

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スルノ効力ヲ有ス豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第三百四十六條 罰及費用ノ言渡ハ證人ノ不

參カ充分宥恕スヘキトキハ之ヲ爲サス又後

日宥恕スヘキ充分ノ理由ヲ申出ルトキハ證

人ニ對シ言渡シタル命ハ更ニ之ヲ取消ス

證人ノ届出及申請ハ書面又ハ裁判所書記ノ

調書又ハ口頭ヲ以テ訊問ノ爲メ定メタル新

期日ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十七條 獨逸宰相各邦ノ宰相共和市

第二百九十五條 證人其出頭セザリシコト後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ
證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族證人ナルキハ受命判事

府元老議官獨逸高等官廳ノ長官及各省長官
ハ其官廳所在地ニ於テ訊問セラレ其所在地
外ニ滞在スルキハ其滞在地ニ於テ訊問ス
獨逸集議院ノ議員ハ其院所在地ニ滞在中ハ
其地ニ於テ獨逸立法院ノ議員ハ其會期間及
ヒ其院所在地ニ滞在中ハ其地ニ於テ訊問
ス

此規定ニ違ハントスルニハ左ノ許可ヲ要ス

獨逸宰相ニ就テハ皇帝ノ許可

宰相及獨逸集議院ノ議員ニ就テハ各邦君主
ノ許可

共和市府元老議官ニ就テハ其院ノ許可

第一項ニ記載シタル其他ノ官吏ニ就テハ其
直近長官ノ許可

立法院ノ議員ニ就テハ其院ノ許可

第三百四十八條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ム

ノ權アリ

第一 當事者一方ノ結婚豫約者

第二 當事者一方ノ配偶者但其既ニ婚姻

ノ解除シタルキト雖モ亦同シ

第三 當事者一方ト直系ノ血族姻族又ハ

養子ノ關係アル者又ハ三級親マテノ傍

系ノ血族又ハ二級親マテノ姻族ノ關係

アル者姻族ノ關係ヲ生シタル婚姻ヲ解

除シタルトキト雖モ亦同シ

第四 僧侶教導執行ノ際委託セラレタル

事件ニ關スルトキ(日、二九八第二)

第五 官職身分又ハ職業ニ因リ其性質上

又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス
各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ
訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルキハ其現
在地ニ於テ之ヲ訊問ス
帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ
所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問
ス

第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ム

ト得

第一 原告若シハ被告又ハ其配偶者ト親

族ナルキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シ

タルキト雖モ亦同シ

第二 原告若シハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若シハ被告ト同居スル者又ハ

雇人トシテ之ニ仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ムノ

權利アル旨ヲ告ク可シ

又ハ法律上黙秘スヘキ事實ヲ委託セラレタル者其黙秘ノ義務アル事實ニ關スルトキ(日、二九八第一)

第一 乃至第三ニ掲ケタル者ニハ訊問前其證言ヲ拒ムノ權利アルヲ告ケサル可ラス

第四第五ニ掲ケタル者ノ訊問ハ其證言ヲ拒

マサルトキト雖モ黙秘ノ義務ニ背クニアラサレハ證言ヲ爲ヌヲ得サルコトノ判然スル

事實ニ及ホヌコトヲ得ス

第三百四十九條 證言ハ左ノ問ニ付キ之ヲ拒ムコトヲ得

第一 答辯ニ因リ證人又ハ之ト第三百四十八條第八條乃至第三ニ掲ケタル關係ヲ有スル

者ニ財産權上直接ノ損害ヲ生セシムヘキ

問

第二 答辯ニ因リ證人又ハ第三百四十八條

第一乃至第三ニ掲ケタル證人ノ親族ノ恥

辱ニ販ヌルカ又ハ刑事裁判上ノ訴追ノ危

難ヲ招クヘキ問

第三 證人カ技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニス

ルニ非サレハ答辯スルコト能ハサル問

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏ヨリシ者カ其職務上黙秘ス可キ義務アル情況

ニ關スルキ(獨、三四八第五)

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、

神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委

託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ

黙秘ス可キモノニ關スルキ(獨、三四八第

四及第五)

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲

ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上

ノ訴追ヲ招クノ恐アルキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲

ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ

生セシム可キキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニ

スルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルキ

第三百五十條 第三百四十八條第一乃至第三及ヒ第三百四十九條第一ノ場合ニ於テ證人ハ左ノ事項ニ付テハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 成立ノ際證人トシテ立會ハシメラレタル權利行為ノ成立及旨趣

第二 家族ノ出產婚姻又ハ死亡

第三 家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實

第四 爭トナリタル權利關係ニ關スル行為ニノ證人カ當事者一方ノ前主又ハ代理人トシテ係爭權利關係ニ關シタル行為

第三百四十八條第四第五ニ掲ケタル者其默秘ノ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒

ムコトヲ得

第三百五十一條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ爲メ定メタル期日前ニ書面又ハ裁判所書記ノ調書ヲ以テ又ハ其期日ニ於テ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明セサル可ラス

其説明ヲナスニハ第三百四十八條第四第五ノ場合ニ於テハ其爲シタル職務上ノ宣誓ヲ指示シテ保證ヲナスヲ以テ足レリトス

證人其拒絕ヲ書面又ハ裁判所書記ノ調書ヲ以テ陳述シタルトキハ其訊問ノ爲メ定メタル期日ニ出張スルノ義務ナシ證人ノ陳述ヲ受領シタルコト又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作リタルコトニ付テハ裁判所書記之ヲ當事者

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行為ノ成立及旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係爭ノ權利關係ニ關シ爲シタル行為

前條第一號第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スルノ義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作リタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

ニ通知ス

第三百五十二條 拒絶ノ當否ニ付テハ受訴裁判所ハ當事者ヲ審訊シタル後裁判ス

證人ハ辯護士ヲ以テ代理セシムルノ義務ナシ

中間判決ニ對シテハ即時抗告ヲ許ス

第三百五十三條 證人カ其拒絶ヲ書面又ハ裁判所書記ノ調書ヲ以テ陳述シ期日ニ出頭セサルトキハ其陳述ニ基キ受訴裁判所ノ職員ハ報告ヲ爲サ、ル可ラス

第三百五十四條 受命判事又ハ受託判事ノ證面前ニ於テ拒絶ヲ爲スモハ書面又ハ裁判所書記ノ調書ヲ以テ爲サ、リシ證人ノ陳述ハ當事者ノ陳述ト共ニ之ヲ調書ニ作ラサル可

カラス

證人及ヒ當事者ハ受訴裁判所ノ口頭辯論ノ爲メ職權ヲ以テ之ヲ呼出ス

受訴裁判所ノ職員ハ證人及ヒ當事者ノ爲シタル陳述ニ基キ報告ヲ爲ス報告者ノ演述後證人及ヒ當事者ハ其申立ヲ辯明スル爲メ發言スルコトヲ得漸ナル事實又ハ漸ナル證據方法ハ之ヲ申立ルコトヲ得ス

第三百五十五條 原因ヲ開示スルコトナリ又ハ其開示シタル原因ヲ著大ナラストノ言渡確定シタル後證言又ハ宣誓ヲ拒ムトキハ其證人ニハ申立ヲ要スルコトナクモテ其拒絶ニ因リ生シタル費用并ニ三百「マルク」以下ノ罰金及ヒ其罰金ヲ徵收スルコト能ハサル

第三百一條 拒絶ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絶ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告カ出頭セサルモハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス
右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
此抗告ハ執行ヲ停止スルノ効力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セズシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルモハ申立ヲ要セズシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絶ニ因テ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス
證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗

場合ノ爲メ六週以内ノ勾留ヲ言渡ス

再度拒絶ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ強テ證
言ヲナサシムル爲メ其審級ニ於テ訴訟ノ終
結セサル間ニ限り勾留ヲ命ヌ強制執行手續
ニ於ケル勾留ノ規定ハ亦之ヲ準用ス

此決定ニ對シテハ抗告ヲ許ス

陸軍現役若クハ海軍現役ノ軍人軍屬ニ對ス
ル罰ノ確定及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シ
テ之ヲ爲ス

告ヲ爲スコトヲ得(獨、三七四第二項)

此抗告ハ執行ヲ停止スルノ効力ヲ有ス
豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ
對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ
囑託シテ之ヲ爲ス(獨、三七四第三項)

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手
方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃
至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スル
コトヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之
ヲ爲ス可シ此期限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ
主張スルヲ得サリシコトヲ疏明スルキニ限り
其證人ヲ忌避スルコトヲ得
忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス
コトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭
辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ
上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言
スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ
得

第三百五十六條 各證人ハ各別ニ其訊問前宣
誓ヲ爲サ、ル可ラス但其宣誓ハ特別ノ原因
アルトキ殊ニ其宣誓ノ許否ニ付キ疑アルト
キハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延ブルコトヲ得
當事者ハ宣誓ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀
其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判
然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サ
シム可シ
然レモ宣誓ハ特別ノ原因アルキ殊ニ之ヲ爲
サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルキハ訊

第三百五十七條 訊問前ニ爲スヘキ誓詞ハ左

ノ如シ

證人ハ良知ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘

セス又何事ヲモ附加セサルヘシ

訊問後ニ爲スヘキ誓詞ハ左ノ如シ

證人ハ良知ニ從ヒ眞實ヲ述ヘタリ何事ヲ

モ黙秘セサリキ又何事ヲモ附加セサリキ

第三百五十八條 左ニ掲ル者ハ宣誓ヲ爲サシ

メヌシテ訊問ス

第一 訊問ノ時未ダ十六歳ニ達セサル者

又ハ知能ノ欠缺若クハ薄弱ノ爲メ宣誓

ノ本旨及ヒ效用ヲ充分ニ了解セサル者

第二 刑法ノ規定ニ從ヒ證人トナリ宣誓

シテ訊問セラル、能カナキ者

第三 第三百四十八條第一乃至第三及ヒ

第三百四十九條第一及第二ニ依リ證言

ヲ拒絕スルノ權利アリテ之ヲ行使セサ

ル者但第三百四十九條第一及ヒ第二ニ

掲ケタル者ハ證言拒絕ノ權利ニ關スル

事實ニ付キ申立テラレタルトキニ限ル

第四 訴訟ノ成績ニ直接ノ關係ヲ有スル

者

受訴裁判所ハ後日第三第四ニ掲ケタル者ノ

問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ

場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲ

モ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ

宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良

心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何

事ヲモ附加セサリシ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ

以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百

條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメヌシテ

參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未ダ滿十六歳ニ達セサル

者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必

要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又

ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八

條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證言

ヲ拒絕スルノ權利アリテ之ヲ行使セ

サル者但第二百九十八條第三號並ニ第

四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關ス

ル事實ニ付キ證言ヲ爲ス可キコトヲ申立

テラレタルトキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有

宣誓ヲ命スルコトヲ得

第三百五十九條 各證人ハ各別ニシテ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサルトキニ訊問ス
供述ノ齟齬スル證人ハ對質セシムルコトヲ得

第三百六十條 訊問ハ證人ニ其氏名、年齢、宗
旨、身分又ハ職業及ヒ住所ヲ問フヲ以テ始
マル必要ナル場合ニ於テハ證人ニ對シ其事
件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事
者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス

第三百六十一條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ
知リタルモノヲ牽連シテ供述セシム
供述ヲ明白ニシ及ヒ完全ナラシメ且證人ノ
知り得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合

合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス

裁判長ハ裁判所ノ各部員ニ其求メニ因リ問
ヲ發スルコトヲ許ス(日、三一五第一項)

第三百六十二條 當事者ハ事件又ハ證人ノ關
係ヲ明白ナラシムル爲メ有用ナリト認ムル
問ヲ發セシムル(裁判長ヲシテ)ノ權アリ
裁判長ハ當事者ニ證人ニ對シ直接ニ問ヲ發
スルコトヲ許可スルコトヲ得其辯護士ニハ
求メニヨリ之ヲ許可セサルヘカラス裁判所
ハ問ノ許否ニ付テノ異議ヲ裁判ス

スル者

第三百十一條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證
人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス
證人ノ供述互ニ齟齬シタルキハ之ヲ對質セ
シムルコトヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其氏名、年
齡、身分、職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マ
ル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證
言ノ信用ニ關スル情況殊ニ當事者トノ關係
ニ付テノ問ヲ爲ス可シ

第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知
リタルモノヲ牽連シテ供述セシム可シ
證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知
り得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合

ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ
朗讀シ其他覺書ヲ用ヰルコトヲ得ス但算數ノ
關計ニ限リ覺書ヲ用ヰルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證
人ニ問ヲ發スルコトヲ得(獨、三六一末項)
當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得
ス然レモ當事者ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシ
ムル爲メニ其必要ナリトスル問ヲ發センコ
トヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得
發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ
直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若
クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セスシテ訊

第三百六十三條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

受命判事又ハ受託裁判事ハ訊問ノ際當事者一方ノ中立ヲタル問ヲ發スルコトヲ否ミタルトキ受訴裁判所ハ後日其問ニ付キ證人ヲ訊問スヘキコトヲ命スルヲ得

再度又ハ後日訊問ヲナスノ際判事ハ證人ニ對シ再度ノ宣誓ニ換ヘ以前ナシタル宣誓ヲ指示シテ其供述ノ正實ナルコトヲ保證セシムルヲ得

(第三百四十條) 證人ノ證據調ハ左ノ場合ニ於テハ受訴裁判所ノ職員又ハ他ノ裁判所ニ

委任スルコトヲ得

第一 眞實ヲ發見スル爲メ證人ヲ其場所ニ就テ訊問スルコトヲ相當ナリト認ムルトキ

第二 受訴裁判所ニ於テ證據ヲ爲スニ重大ナル困難アルヘキトキ

第三 證人カ受訴裁判所ニ出頭スルニ差支アルトキ

第四 證人カ受訴裁判所所在地ヨリ遠隔ノ地ニ滞在スルトキ

各邦君主及ヒ其家族并ニ「ホーヘンツォルレルン」公家ノ家族ハ受訴裁判所ノ職員又ハ他ノ裁判所カ其住居ニ就テ之ヲ訊問ス

第三百六十四條 當事者ハ其申立テタル證人

問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルキ

第二 証人訊問ノ完全ナラサルキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルキ

第五 其他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ

又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メニ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在テ其裁判所ニ出頭スルニ付

キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルキ

ヲ抛棄スルコトヲ得然レモ相手方ハ出頭シ
タル證人ヲ訊問シ又既に訊問ヲ始メタルト
キハ之ヲ續行スルコトヲ求ルヲ得(日、三
二〇)

第三百六十五條 證據調ヲ委任セラレタル判
事ハ出頭セス又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テ法
律上ノ處分ヲ爲スノ權ヲ有シ亦委任完結ノ
後ト雖モ一般ニ許サレタル場合ニ限リ其處
分ヲ再ヒ取消シ證人ニ發シタル問ノ許否ニ
付キ假ニ裁判シ且證人ノ再訊問ヲ爲スノ權
ヲ有ス(日、三一九)

第三百六十六條 各證人ハ手数料規則ニ從ヒ
時日消費ニ付テノ賠償及ヒ出頭カ旅行ヲ要
スルトキハ其旅行及ヒ訊問地滞在ノ爲メニ
生スル費用ノ辨償ヲ請求スルノ權ヲ有ス

第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十
五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタ
ル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事
又ハ受託判事ニモ屬ス
證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ
理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ
又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答
フルコトヲ拒ムキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判
ヲ爲スノ權ハ受訴裁判所ニ屬ス
受命判事又ハ受託判カ原告若クハ被告ヨリ

申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムキハ原告若
クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判
ヲ求ムルコトヲ得
證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意
見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得(獨、三六五)
第三百二十條 證人ヲ申出テタル原告若クハ
被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ抛
棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルキ
ニ限リ之ヲ抛棄スルコトヲ得(獨、三六四)
第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其
出頭ノ爲メニ旅行ヲ要スルキハ旅費ノ辨濟
ヲ請求スルコトヲ得
其金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チ
ニ之ヲ求ムルコトヲ得

舉證者ノ豫納シタル金額不足スルキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百二十四條 立會ヲ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得

或ル種類ノ鑑定ニ付キ鑑定人ヲ公任シタル

場合ニ於テハ別段ノ事情ノ爲メ必要ナルトキニ限り他ノ鑑定人ヲ撰定ス可シ

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問セラル、ニ適當ナル人ヲ指定スヘキコトヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第八節 鑑定證

第三百六十七條 證人證據ニ付テノ規定ハ鑑定證ニモ亦之ヲ準用ス但以下諸條ニ於テ之ニ異ナル規定アルモノハ此限ニ在ラス

第三百六十八條 證據ノ申立ハ鑑定スヘキ點ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百六十九條 立會ヲヘキ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名ニ限ルコトヲ得又其初ニ任命シタル鑑定人ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得

或ル種類ノ鑑定ニ付キ鑑定人ヲ公任シタル

場合ニ於テハ別段ノ事情ノ爲メ必要ナルトキニ限り他ノ鑑定人ヲ撰定ス可シ

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問セラル、ニ適當ナル人ヲ指定スヘキコトヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

當事者カ鑑定人トナル一定ノ人ニ付キ合意シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從ハサル可カラス但裁判所ハ當事者ノ撰定ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百七十條 (日、三百三十一條ニ對比ス)

第三百七十一條 鑑定人ハ判事ヲ忌避スルノ權アルト同一ノ原因ニ依リ之ヲ忌避スルコトヲ得但鑑定人ヲ證人トシテ訊問シタルコトヲ以テ忌避ノ原因ト爲スコトヲ得

忌避ノ申請ハ鑑定人ヲ任用シタル裁判所又ハ判事ニ其訊問前ニ之ヲ爲シ書面ノ鑑定ニアリテハ其鑑定書ヲ差出ス前ニ之ヲ爲ス此期限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ申立ルコトヲ得サリシヨトヲ説明スルトキニ限り忌避スルコトヲ許ス忌避ノ申請ハ裁判所書記ノ調書ヲ以テ陳述スルコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ説明セサル可ラヌ宣誓ハ其説明ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ禁ス其裁判ハ第二項ニ掲ケタル裁判所又ハ判事之ヲ爲ス豫メ關係人ノ口頭辯論ヲ爲スコトヲ要セヌ

忌避ノ原因アリトシテ宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ許サヌ忌避ノ原因ナシトシテ宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ許ス

第三百七十二條 鑑定人ニ任命セラレタル者

ハ必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メニ公ニ任命セラレタルトキ又ハ鑑定ヲ爲ス爲メ知ラザル學術技術又ハ工藝ヲ營業ノ爲メ執行スルトキ又ハ其執行ノ爲メ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタルトキハ其任命ニ從ハサル可カラヌ
裁判所ニ於テ鑑定ヲ爲サント述ヘタル者モ亦鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百七十三條 鑑定人ハ證人カ証言ヲ拒ム

第三百二十六條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲スノ義務アリ

- 第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メニ公ニ任命セラレタル者
- 第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技術、若クハ職業ニ常ニ従事スル者又ハ學術、技藝若クハ職業ニ従事スル者爲メニ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲ヌ可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タルノ義務ナキト雖モ鑑定ヲ爲スノ義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ証言ヲ拒ム

ノ權アルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ムノ
權アリ裁判所ハ其他ノ原因ニ依テモ亦鑑定
人ニ鑑定ヲ爲ス義務ヲ免除スルコトヲ得
官吏ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトハ其所屬
官廳ヨリ訊問ノ爲メニ職務上ノ利益ニ損害
ヲ生ヌヘキコトヲ述ルトキハ之ヲ爲サズ

第三百七十四條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人
出頭セヌ又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ
費用ノ賠償及ヒ「三百マルク」以下ノ罰金ヲ
言渡ヌ再度服命セサル場合ニ於テハ更ラニ
六百「マルク」以下ノ罰金ヲ言渡ヌコトヲ
得

此決定ニ對シテハ抗告ヲ許ス(日、三〇二)
現役ノ陸軍若クハ現役ノ海軍軍人軍屬ニ對

スル罰ノ確定及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ屬託
シテ之ヲ爲ヌ(日、三〇二)

第三百七十五條 鑑定人ハ當事者雙方其宣誓
ヲ拋棄セザルトキハ鑑定ヲ爲ス前左ノ宣誓
ヲ爲サ、ル可ラヌ

鑑定人ハ其要求セラレタル鑑定ヲ偏頗ナシ
且良知良心ニ從テ爲ヌコトヲ誓フ

鑑定人其關係スル種類ノ鑑定ヲ爲ヌ爲メ一
般ニ宣誓シタルトキハ其宣誓ヲ指示スルヲ
以テ足レリトヌ

第三百七十六條 書面上ノ鑑定ヲ命セラル、
トキハ鑑定人ハ其署名シタル鑑定書ヲ裁判
所書記課ニ納付ス
裁判所ハ書面上ノ鑑定ヲ説明セシムル爲メ

コヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ムノ
權利アリ
官吏、公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキ
ハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ヌ

第三百二十八條 鑑定ヲ爲スノ義務アル鑑定
人出頭セヌ又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テ
ハ其者ニ對シ此カ爲メニ生シタル費用ノ賠
償及ヒ罰金ヲ言渡ヌ可シ但其鑑定人ヲ勾引
スルコトヲ得ヌ

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ
其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行ス可
キ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左
ノ諸件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ
之ヲ述ヘシム可キヤ

鑑定人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得(日、三三〇

第三)

第三百七十七條 裁判所ハ鑑定ヲ不十分ナリ

ト認ルトキハ同一ノ鑑定人又ハ他ノ鑑定人

ニ新ニ鑑定ヲ命スルコトヲ得(日、三三〇第

四)

裁判所ハ鑑定人鑑定ヲ爲シタル後有効ノ忌

避ヲ受ケタルトキハ他ノ鑑定人ニ鑑定ヲ命

スルコトヲ得

(第三百七十條) 受訴裁判所ハ證據調ヲ委託

シタル判事ニ鑑定人ノ任命ヲ委任スルコト

ヲ得其判事ハ此場合ニ於テハ前條ニ於テ受

訴裁判所ニ與ヘタル權ヲ行フ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ

於テ各意見カ異ナルキハ共同ニテ鑑定

書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作

ラシムヘキヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其

一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルキハ同一

又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サ

シム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命

ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得

此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第

三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ

第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權

ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日當、旅費及ヒ立

替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準

用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ

事實又ハ情況ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ

因テ確定ス可キキハ人證ニ付テノ規定ヲ適

用ス

第八節 書證

第三百八十條 官廳カ其權限内ニ於テ又ハ公

ケノ信用ヲ付與セラレタル人カ其認許セラ

レタル職務内ニ於テ規定ノ方式ニ依テ作り

タル證書(公正證書)ハ官廳又ハ公書人ノ前

ニ於テ爲セシ陳述ニ付テ作リタルトキハ官廳又ハ公正ノ證書ニ作リタル事柄ニ就テ完全ノ證據ト爲ス

其事柄ニ付テ作リタル證書ヲ不正ナリトスルノ證據ハ之ヲ舉ルコトヲ許ス

第三百八十一條 私署證書ハ證書交付人之ニ署名シ又ハ裁判所若クハ公證人ノ認證シタル手記アルトキニ限り證書交付人カ之ニ載セタル陳述ヲ爲シタルコトニ付テハ完全ノ證據ト爲ス

第三百八十二條 官廳ノ作リタル公正證書ニシテ職務上ノ命令處分又ハ裁判ヲ載スルモノハ其所載ノ事項ニ付キ完全ノ證據ト爲ス

第三百八十三條 第三百八十條第三百八十二條ニ記載シタル事項以外ノ他ノ事項ヲ載スル公正證書ハ之ヲ以テ證シタル事實ニ付テ完全ノ證據ト爲ス

其證シタル事實ヲ不正ナリトスルノ證據ハ各邦法律ニ於テ其證據ヲ禁止セス又ハ制限セサルトキニ限り之ヲ許ス

其證書カ官廳又ハ公書人ノ實驗ニ基カサルトキハ第一項ノ規定ハ各邦法律ニ依リ其證書ノ證據力カ實驗ニ關セサルトキニ限り之ヲ適用ス

第三百八十四條 畫線削除挿入又ハ其他外面上欠缺カ證書ノ證據力ノ全部又ハ一部ヲ廢棄シ又ハ減殺スルノ程度ハ裁判所ハ其自由

ナル心證ヲ以テ之ヲ裁判ス

第三百八十五條 證據ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百八十六條 證書カ舉證者ノ主張ニ依ルニ相手方ノ手中ニ存スルトキハ證據ノ申出ハ相手方ニ證書ノ提出ヲ命センコトノ申立ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百八十七條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ訴訟外ニ於テモ亦求ルコトヲ得ルトキ

第二 證書カ其所載ニ從ヒ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

證書ハ殊ニ其關製ニ關シ利益ヲ有スル者又ハ相互ノ權利關係ヲ其證書中ニ掲ケラレタル者ノ爲ニハ之ヲ共通ト看做ス權利行為ニ付キ當事者ノ間ニ於テ又ハ其一名ト權利行為ノ共通媒介人トノ間ニ於テ爲シタル書面
上ノ協議モ亦之ヲ共通ト看做ス

第三百八十八條 相手方ハ亦其手ニ存スル證書ニシテ訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スルノ義務アリ其引用ヲ準備書面中ニノミ爲シタルトキト雖モ亦同シ

第三百八十九條 申立ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 證書ノ表示

第二 證書ヲ以テ證明スヘキ事實ノ表示

第三百三十四條 證書ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命センコトヲ申立テテ之ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スルノ義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルキ

第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書

ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スルノ義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ

第三百三十八條 證書ノ提出ヲ命センコトノ申立ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 證書ノ表示

第二 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ表示

第三 證書所載ニ付成ルヘク完全ナル表

示

第四 證書カ相手方ノ占有ニ在リトノ主

張ノ基ク所ノ事情ノ表示

第五 證書ヲ提出スハキ義務ノ原因ノ表

示其原因ハ之ヲ説明ス

第三百九十條 裁判所ハ證書ニ依リ證スヘキ

事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナリト認ル

場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手中ニ存スル

コトヲ自白スルトキ又ハ相手方カ申立ニ對

シ陳述セサルトキハ證書ノ提出ヲ命ス

第三百九十一條 相手方ハ證書ノ其占有ニ在

ルコトヲ爭フトキハ左ノ宣誓ヲ爲サヘル可

ラス

相手方ハ注意シテ穿鑿シムル後證書ノ其

占有ニ在サルコトノ心證ヲ得タリキ且舉

證者ニ證書ノ使用ヲ爲サシメサルノ故意

ヲ以テ之ヲ紛失セサリキ且證書ノ所在ヲ

モ亦知了セス

裁判所ハ事項ノ事情ニ應シ前項ノ誓詞ヲ變

更スルコトヲ決定スルコトヲ得

共同訴訟人法律上代理人未成年者及ヒ浪費

者ノ宣誓ニ付テハ第四百三十四條乃至第四

百三十六條ノ規定ヲ適用ス

官廳カ證書ヲ提出セサル可ラサルトキハ證

書ノ保管ヲ委任セラレタル官吏宣誓ヲ爲

ス

第三百九十二條 相手方カ證書ヲ提出シ又ハ

第三 證書ノ旨趣

第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主

張スル理由タル情況

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表

示

第三百三十九條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可

キ事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナリト認

ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存ス

ルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セ

サルトキハ證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命

ス

第三百四十條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨

ヲ申立ツルキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ

定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ

又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意

ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメ

タルヤ否ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規

定ニ從ヒ相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルキハ證書カ其官廳ノ保藏

ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルヲ得サル旨

ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判所ハ

此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ

定ム可シ

第三百四十一條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ

宣誓ヲ爲スヘキノ命ニ従ハサルトキ舉證者
カ證書ノ謄本ヲ差出シタルトキハ其謄本ヲ
正當ナルモノト看做ス其謄本ヲ差出サ、ル
トキハ證書ノ性質及ヒ所載ニ付テノ舉證者
ノ主張ヲ證明セラレタルモノト看做スコト
ヲ得

又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其
證書ヲ提出ス可シトノ命ニ従ハヌ又ハ相手
方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問
ヲ受ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルキ又ハ舉
證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書
ヲ隠匿シ若クハ使用ニ耐ヘサランメタル
ノ明確ナルキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ
謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差
出ササルキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ
性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナ
ト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定
メタル期間内ニ差出ササルキハ相手方タル
官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ス

第三百九十三條 證書カ舉證者ノ主張ニ依ル
ニ第三者ノ手ニ存スルトキハ證據ノ申出ハ
證書ヲ取寄スル爲メ期間ヲ定メコトノ申
立ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百九十四條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ
於ケルト同一ノ理由ニ因リ證書ヲ提出スル
義務アリ第三者ハ訴ヲ以テスルニアラサレ
ハ強テ提出ヲナサシメラル、コトナシ

第三百九十五條 第三百九十三條ニ從ヒ爲ヌ
ヘキ申立ヲ辯明スルニハ舉證者ハ第三百八
十九條第一乃至第三及ヒ第五ノ要件ヲ踐ミ
且其他證書ノ第三者ノ手ニ在ルコトヲ疎明
セサル可ラス

第三百九十六條 證書ニ依リ證スヘキ事實ノ

第三百四十二條 舉證者其使用セントスル證
書カ第三者ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルキハ
書證ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル爲メノ期間
ヲ定メコトヲ申立テ之ヲ爲ス

第三百四十三條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ
於ケルト同一ナル理由ニ因リ證書ヲ提出ス
ルノ義務アリ然レモ強テ證書ヲ提出セシム
ルコトハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 第三百四十二條ニ從ヒ申立
ヲ爲スニハ第三百三十八條第一號乃至第三
號及ヒ第五號ノ要件ヲ履ミ且證書カ第三者
ノ手ニ存スルコトヲ疎明ス可シ

第三百四十五條 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ

重要ニシテ且申立カ前條ノ規定ニ適スルト
キハ裁判所ハ舉證者ノ得ヘキ期日ニ於テ證
書提出ノ期間ヲ定ム

相手方ハ第三者ニ對スル訴ノ完結シタルト
キ又ハ舉證者カ訴ノ提起若クハ訴訟ノ實行
若クハ強制執行ノ實行ヲ遅延スルトキハ期
間ノ滿了前ニ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ルコト
ヲ得

第三百九十七條 證書カ舉證者ノ主張ニ依ル
ニ官廳又ハ官吏ノ手ニ在ルトキハ證據ノ申
出ハ官廳又ハ官吏ニ證書ノ送付ヲ囑託スル
コトヲ申立テテ之ヲ爲ス

此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判
所ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ證

書ニハ之ヲ通用セス

官廳又ハ官吏カ第三百八十七條ニ依リ規定
ノ義務アル場合ニ於テ證書ノ送付ヲ拒ムト
キハ第三百九十三條乃至第三百九十六條ノ
規定ヲ適用ス

第三百九十八條 證據決定ノ言渡後之ニ載セ
タル係爭事實ニ付キ第三百九十三條第三百
九十七條ニ依リ證據ヲ申出ルトキハ證書ノ
取寄ニ必要ナル訴訟手續ノ爲ニ訴訟ノ完結
ヲ遅延シ且裁判所カ當事者ノ一方カ訴訟ヲ
遅延スルノ故意ニ出テ又ハ甚シキ怠慢ニ依
リ證據ヲ早ク申出テサリシコトノ心證ヲ得
ルトキハ申立ニ依リ證據申出ヲ却下ス

重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スル
キハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ定ム可シ

第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルキ又ハ舉
證者カ訴ノ提起、訴訟ノ繼續又ハ強制執行
ヲ遅延シタルキハ相手方ハ前項ノ期間ノ滿
了前ト雖モ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルコト
ヲ得

第三百四十六條 舉證者其使用セントスル
證書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張
スルキハ書證ノ申出ハ證書ノ送付ヲ官廳又
ハ公吏ニ囑託セラレシコトヲ申立テテ之ヲ爲
ス

此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判

所ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ證書

ニハ之ヲ適用セス
官廳又ハ公吏カ第三百三十六條ノ規定ニ基
キ證書ヲ提出スルノ義務アル場合ニ於テ其
送付ヲ拒ムキハ第三百四十二條乃至第三百
四十五條ノ規定ヲ適用ス

第三百四十七條 證據決定ヲ爲シタル後第三
百四十二條及ヒ第三百四十六條ノ規定ニ從
ヒ書證ヲ申出テタル場合ニ於テ證書取寄ノ
手續ノ爲メニ訴訟ノ完結ヲ遅延スルニ至ル
可ク且裁判所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟
ヲ遅延スルノ故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ
因リ書證ヲ早ク申出テサリシコトノ心證ヲ得
タルキハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下ス

第三百九十九條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出ヲ顯著ナル障碍アルカ爲メ爲スコトヲ得サルトキ又ハ證書ノ重要ニシテ紛失ノ恐レアルカ若クハ毀損スルノ恐レアルカ爲メ其提出ヲ懸念スヘキトキハ受訴裁判所ハ證書ヲ其部員ノ一名又ハ他ノ裁判所ニ提出ス可キコトヲ命スルコトヲ得

第四百條 公正證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出シ又ハ認證上自ラ公正證書ノ要件ヲ供ヘタル認證アル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ハ舉證者カ原本ヲ提出シ又

ハ原本ヲ提出スルノ障碍ト爲ル事實ヲ舉ケテ疏明スヘキコトヲ命スルコトヲ得此命カ效ナキトキハ裁判所ハ其自由ナル心證ヲ以テ認證ヲ得タル謄本ニ執レノ證據力ヲ與フヘキヤヲ裁判ス

第四百一條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限リ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得

第四百二條 法式及ヒ旨趣ニ依リ官廳又ハ公

ルコトヲ得

第三百四十八條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障碍アルキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ調書ニ添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルキハ第七條第二項ノ規定ニ從ヒ作リタル抄本ヲ之ニ添附ス可シ

第三百四十九條 公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レモ裁判所ハ舉證者ニ正本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者カ未ダ提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其證書ノ効力又ハ解釋ニ付テノミ爭フ爲スルハ謄本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉證者ニ原本ノ提出ヲ命スルコトヲ得
提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルキハ裁判所ハ心證ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キヤヲ裁判ス

第三百五十條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルキニ限リ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百五十一條 公正證書又ハ檢眞ヲ經タル

私署證書ヲ偽造若クハ變造ナリト主張スルモノハ其證書ノ眞否ヲ確定セシメテ申立ヲ爲ス可シ

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

ノ信用アル人ノ作りタルコトノ判然ナル證書ハ自ラ眞正ナリトノ推測ヲ受ク
裁判所ハ其眞正ナルコトニ付キ疑ヲ抱クトキハ職權ヲ以テモ亦證書ヲ作りタル官廳又ハ人ニ眞正ナルコトニ付キ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

第四百三條 外國官廳又ハ公使ノ信用アル外國人ノ作りタル證書ヲ詳細ナル證明ナクシテ眞正ナルモノト看做スヘキヤ否ハ裁判所

カ其場合ノ事情ニ依リ之ヲ定ム
右證書ノ眞正ナルコトヲ證明スルニハ獨逸國ノ領事又ハ公使ノ公證ヲ以テ足レリトス

第四百四條 私署證書ノ眞正ナルコトニ付テハ舉證者ノ相手方ハ第百二十九條ニ從ヒ陳述セサル可カラヌ

證書中ニ署名アルトキハ其陳述ハ署名ノ眞正ナルコトニ向テ之ヲ爲ヌ
其陳述ヲ爲サルトキハ眞正ナルコトヲ爭ハント欲スルノ意カ當事者ノ他ノ陳述ヨリ推定スルコトヲ得サルトキハ其證書ハ之ヲ認メタルモノト看做ス

第四百五條 認メラレサル私署證書ノ眞正ナルコトハ之ヲ證明セサル可ラヌ
署名ノ眞正ナルコト確定シ又ハ證書中ニ存スル手記ヲ裁判所又ハ公證人カ認證シタルトキハ其署名又ハ手記ノ上ニ在ル文面ハ自ラ眞正ナリト推測セラル

第四百五條 認メラレサル私署證書ノ眞正ナルコトハ之ヲ證明セサル可ラヌ
署名ノ眞正ナルコト確定シ又ハ證書中ニ存スル手記ヲ裁判所又ハ公證人カ認證シタルトキハ其署名又ハ手記ノ上ニ在ル文面ハ自ラ眞正ナリト推測セラル

第四百六條 證書ノ眞否ノ證據ハ手跡對照ヲ以テモ亦之ヲ舉グルコトヲ得

此場合ニ於テハ舉證者ハ對照ニ適當ナル書面ヲ提出シ又ハ第三百九十七條ノ規定ニ從ヒ其送付ヲ申立テ又ハ必要ナル場合ニ於テ其書面ノ眞正ナルコトノ證據ヲ申出テサル可ラス

對照ニ適當ナル書面カ相手方ノ手ニ存スルトキハ相手方ハ舉證者ノ申立ニ因リ之ヲ提出スル義務アリ第三百八十六條乃至第三百九十一條ノ規定ハ亦之ヲ準用ス相手方カ對照ニ適當ナル書面ヲ提出スヘシトノ命又ハ第三百九十一條ニ定メタル宣誓ヲ爲スヘシトノ命ニ從ハサルトキハ其眞正ナルコトノ

證據ハ之ヲ舉ケタルモノト看做ス

舉證者カ對照ニ適當ナル書面カ第三者ノ手ニ存シ且訴ヲ以テ其提出ヲ爲サシムルヲ得ヘキコトヲ疏明スルトキハ第三百九十六條ノ規定ヲ準用ス

第四百七條 書面對照ノ結果ニ付テハ裁判所ハ自由ナル心證ヲ以テ之ヲ裁判シ適當ナル場合ニ於テハ鑑定人ノ意見ヲ聽キタル後之ヲ裁判ス(日、三五三第四項)

第四百八條 眞正ナルコトニ付争アル證書又ハ其旨趣ヲ變更シタリトイヘル證書ハ訴訟ノ完結スルマテハ之ヲ裁判所書記課ニ保管ス但公ノ秩序ノ爲ニ他ノ官廳ニ其證書ヲ交付スルコトヲ要セサルトキニ限ル

第三百五十二條 私署證書ノ眞否ニ付キ争アルキハ裁判所ハ舉證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得

第三百五十三條 私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因テ之ヲ爲ス

證書ノ眞否ヲ證セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲メニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリトノ自白又ハ證明アリタル適當ノ對照書類ナキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス(獨、四〇七)

原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セサルハ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サシテ之ニ從ハサルハ又ハ書様ヲ變シテ手記シタルキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スコトヲ得

第三百五十四條 提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其原本ヲ記録ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

第四百九條 當事者ノ一方カ相手方ニ使用セ
 シメサルノ故意ヲ以テ證書ヲ湮滅シ又ハ使
 用ニ堪ヘサラシムルトキハ其證書ノ性質及
 旨趣ニ付テノ相手方ノ主張ハ證明セラレヌ
 ルモノト看做スコトヲ得

然レモ證書ノ偽造又ハ變造ナリトノ争アル
 トキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ
 之ヲ還付スルコトヲ得ス(獨、四〇八參照)
第三百五十五條 公正證書ノ偽造若クハ變造
 ナルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若ク
 ハ被告ニ惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五
 十圓以下ノ過料ヲ言渡ス
 又私署證書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ争
 フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以
 下ノ過料ヲ言渡ス
第三百五十六條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ
 於テ許ス限リハ事跡ノ紀念又ハ權利ノ證徴
 ノ爲メ作リタル割符、界標等ノ如キモノニ
 モ之ヲ準用ス

第六節 檢證

(第三百二十六條) 檢證ノ申出ハ檢證物ノ表
 示及ヒ證スヘキ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス
(第三百二十七條) 受訴裁判所ハ檢證處分ヲ
 爲スニ一名又ハ數名ノ鑑定人ヲ立會ハシム
 ヘキコトヲ命スルヲ得
 受訴裁判所ハ其職員又ハ他ノ裁判所ニ檢證
 ヲ委任シ亦立會フヘキ鑑定人ノ任命ヲ放任
 スルコトヲ得

第九節 檢證

第三百五十七條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示
 シ及ヒ證ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス
第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ
 際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得
 受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部
 員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ
 得
第三百五十九條 檢證ヲ爲スノ際發見シタル
 事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又
 必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添
 附スヘキ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可
 シ
 若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證

物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正
ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ
證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ
眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサル
ルハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ
被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ
訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自
身カ決定言渡ノ際在廷スルルハ直チニ其訊
問ヲ爲スヲ通例トス

第三百六十二條 訊問ヲ受クル原告若クハ被
告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ

用キルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ
用キルコトヲ得

第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル
理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期
日ニ出頭セサルルハ裁判所ハ其意見ヲ以テ
訊問ニ因テ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當
ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理
人カ訴訟ヲ爲スルハ法律上代理人若クハ訴
訟無能力者ヲ訊問ス可キ又ハ此等ノ者ヲ
共ニ訊問ス可キ又ハ裁判所ノ意見ヲ以テ之
ヲ決定ス

法律上代理人數人アルルハ其一人ヲ訊問ス
可キ又ハ數人ヲ訊問ス可キ又ハ亦前項ニ

第十二節 證據保全

第四百四十七條 證據處分并ニ證人及ヒ鑑定人ノ訊問ハ證據方法ヲ失ヒ又ハ其使用困難ニ至ルノ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十八條 其申請ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲ス又其申請ハ裁判所書記ノ調書ニ依テ陳述スルコトヲ得
切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ尋問ヲ受ク可キ者ノ現在シ又ハ檢證スヘキ物ノ存在スル地ヲ管轄スル區裁判所ニモ亦申立ヲ爲スコトヲ得

訴訟カ未ダ權利拘束トナラサルトキハ前項

ニ記載シタル區裁判所ニ其申立ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 相手方ノ表示
- 第二 證據調ヲ爲スヘキ事實ノ表示
- 第三 證據方法ノ表示殊ニ訊問スヘキ證人及ヒ鑑定人ノ指名
- 第四 證據方法ヲ失ヒ又ハ其使用困難ニ至ルノ恐レアル理由此理由ハ之ヲ疏明ス

第四百五十條 (日、第三百七十一條ニ對比ス)

第四百五十一條 其申請ニ付テノ裁判ハ豫メ

同シ

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スルノ恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キノ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申立ツルコトヲ得

第三百六十六條 訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得
訴訟ノ未ダ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

得

第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 相手方ノ表示
- 第二 證據調ヲ爲ス可キ事實ノ表示
- 第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ス可キトキハ其表示
- 第四 證據ヲ紛失スルノ恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キノ恐アル理由此理由ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百六十八條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯

口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得
申請ヲ許容スル決定ニハ證據ヲ舉クヘキ事
實及ヒ訊問ヌ可キ證人及ヒ鑑定人ノ指名ヲ
具シタル證據方法ヲ記載ス此決定ニ對シテ
ハ不服ヲ申立ルコトヲ得ヌ

第四百五十二條 舉證者ハ場合ノ事情ニ依リ
爲スコトヲ得ヘキトキニ限リ決定及ヒ申請
ノ謄本ヲ送達シテ證據調ノ爲メ定メタル期
日ニ相手方ヲ適當ノ時間ニ呼出シ此期日ニ
於テ其權利ヲ執行スルコトヲ得セシムルノ
義務アリ

此規定ヲ遵守セサルモ證據調ヲ妨クルコト
ナシ

第四百五十三條 證據調ハ一般ニ證據調ニ適

用ヌ可キ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ其證據調ヲ命シタル裁判所
ニ保存ス

(第四百五十條) 第四百四十七條ノ要件ノ具
ハラサルトキト雖相手方ノ承諾アルトキハ
申立ラレタル證據調ヲ命スルコトヲ得

第四百五十四條 各當事者ハ訴訟中證據辯論
ヲ使用スルノ權アリ
相手方カ證據調ヲ爲セシ期日ニ出頭セザリ
シ場合ニ於テハ舉證者カ相手方ヲ適當ノ時

論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得
申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲スコキ
事實及ヒ證據方法殊ニ訊問ヌ可キ證人若ク
ハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ヌ可キ
此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ヌ
第三百六十九條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ
呼出シ又決定及ヒ申請ノ謄本ヲ送達シテ其
權利防衛ノ爲メニ相手方ヲモ呼出ヌ可シ
切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間
ニ相手方ヲ呼出ヌコトヲ得サリシキト雖モ證
據調ヲ妨クルコト無シ

第三百七十條 證據調ハ本章第六節、第七節

及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ
之ヲ保存ヌ可シ各當事者ハ證據調ノ調書ヲ
訴訟ニ於テ使用スルノ權利アリ
受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再
度ノ證據調ヲ命シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ
補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ
條件ナキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ
許スコトヲ得

期ニ於テ期日ニ呼出シタルトキ又ハ自己ノ過失ナクシテ呼出ノ行ハレサリシコト又ハ適當ノ時期ニ呼出ノ行ハレサリシコトヲ疏明スルトキニ限り證據辯論ヲ使用スルノ權アリ

第四百五十五條 舉證者カ相手方ヲ指定セサルトキハ申請ハ舉證者自己ノ過失ナクシテ相手方ヲ指定スル能ハサルコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ許ス

其申請ヲ許容スルトキハ裁判所ハ知レサル相手方ノ爲メ證據調ノ際其權利ヲ防衛セシムルニ付キ代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第四百五十六條 區裁判所ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス但第一編ノ總則并ニ以下諸條ノ特別規定及ヒ區裁判所ノ構成ニ於テ差異ノ生セサルトキニ限ル

第四百五十七條 訴ハ裁判所ニ書面ヲ以テ之ヲ差出シ又ハ裁判所書記ノ調書ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十八條 口頭辯論ノ期日ヲ定メタル後裁判所書記ハ原告カ自ら訴ノ送達ヲ爲サント欲スルコトヲ陳述セサルトキニ限り其送達ヲ擔當ス

(第四百六十三條) 當事者ノ一方ヲ呼出スコトヲ要セサルトキト雖其一方カ豫メ通知ヲ

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサル

ルハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルヲ疏明スル場合ニ限り其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲メニ臨時代理人ヲ任スルヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル限リハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

第三百七十四條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百七十五條 起訴アリタルハ裁判所書記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スルノ手續ヲ爲ス準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス(獨、一二〇第二項參照)

第三百七十六條 原告若クハ被告ハ其中立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サ

受ルニ非サレハ口頭辯論ニ於テ陳述ヲ爲ス
コトヲ得ヘカラスト豫知スル申立及陳述ハ
裁判所書記ノ調書ヲ送達シテ之ヲ其一方ニ
通知スルコトヲ得

此通知ハ直接ニ別段ノ手續ナクシテ之ヲ爲
スコトヲ得

第四百五十九條 就審期間ハ受訴裁判所ノ管
轄地内ニ於テ送達ヲ爲ストキハ三日以上其
管轄地外ト雖獨逸國內ニ於テ送達ヲ爲スト
キハ一週以上大市及ヒ小市事件ニ於テハ二
十四時以上トス
外國ニ送達ヲ爲サルヘカラスルトキハ裁
判所ハ期日ヲ定ムル就審期間ヲ定ム

第四百六十條 訴ハ訴狀又ハ訴ヲ載スル調書

ノ送達ヲ以テ之ヲ提起ス(日、一九〇參照)
第四百六十一條 通常ノ裁判日ニ於テハ當事
者ハ呼出ナク及ヒ期日ノ指定ナクシテ訴訟
辯論ノ爲メ裁判所ニ出頭スルコトヲ得
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ當事者ノ口頭演述
ヲ以テ之ヲ爲ス

第四百六十二條 第四百五十七條第四百五十
八條ノ規定ハ當事者ノ一方ヲ訴訟中ニ呼出
スヘキトキ殊ニ中間判決ヲ更正シ若シハ補
充スルノ申立、故障、原狀回復ノ申立ニ付
テノ辯論ノ爲メ又ハ中断シ若シハ中止シタ
ル訴訟手續ノ再施ニ付テノ辯論ノ爲メ呼出
スヘキトキ又ハ訴訟參加若シハ訴訟告知ヲ
爲スヘキトキニモ亦之ヲ適用ス

レハ相手方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘ
カラサルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方
ニ通知スルコトヲ得

第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達
トノ間ニ少ナクハ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ
要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四
時マテニ短縮スルコトヲ得
送達ヲ外國ニ於テ爲ス可キキハ情況ニ應シ
テ時間ヲ定ム可シ

第三百七十八條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於
テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭
シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スコトヲ得
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ
之ヲ爲ス

第四百六十三條(日、三百六十七條ニ對比ス)

第四百六十四條 口頭辯論ノ際裁判所ハ當事者ニ總テ重要ナル事實ニ付キ十分ニ陳述ヲ爲サシメ及ヒ事件ニ必用ナル申立ヲ爲スコトヲ務メサル可ラス(日、一一二ニ參照)

第四百六十五條 妨訴ノ抗辯ヲ同時ニ本案ノ辯論前ニ提出スヘキ規定ハ裁判所數箇ノ管轄違ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前ニ主張ス可キトキニ限り之ヲ適用ス

區裁判所ハ事物ノ管轄ナキトキハ本按ニ付テ被告ヲ審問スル前之ニ管轄違タルコトヲ注意セシム

妨訴ノ抗辯ニ基キ本按ノ辯論ヲ拒絕スルコトヲ許サス然レトモ又裁判所ハ職權ヲ以テ

此抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第四百六十六條 (日、第九條第二項ニ對比ス)

第四百六十七條 區裁判所ニ屬スル訴訟ニ於テ反訴ヲ以テ又ハ訴ノ申立ヲ擴張(第二百四十條第三第三)ニ因リ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル請求ヲ爲シ又ハ第二百五十三條ニ從ヒ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル權利關係ノ確定ヲ申立ルトキハ區裁判所ハ其管轄違ヲ言渡シ且其訴訟ヲ地方裁判所ニ移送ス但當事者ノ一方カ本按ノ辯論繼續前之ヲ申立テタルトキニ限ル
其判決確定シタルトキハ其訴訟ハ地方裁判

第三百七十九條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キノ規定ハ裁判所管轄違ノ抗辯ニ限り之ヲ適用ス
被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムノ權利ナシ然レモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

所ニ繫屬スルモノト看做ヌ

區裁判所ノ訴訟手續ニ於テ生シタル費用ハ之ヲ地方裁判所ニ於テ生シタル費用ノ一部トシテ處分ヌ

第四百六十八條 當事者カ裁判所ヨリ證書ノ真正ナルコトニ限リ陳述ヲ爲サ、ルカ爲メ證書ヲ認メタルモノトヌ

第四百六十九條 第二百六十九條第三百十三條乃至第三百十九條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セヌ

第四百七十條 當事者一方ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ニ於テ判決又ハ證據決定ニ接者ヌル口頭辯論終結ノ際明確ナラシムルコトヲ至當ナリト認ル部分ニ限リ法廷調書ヲ以テ之

ヲ明確ニス

自白并ニ要求セラレタル宣誓ノ承諾又ハ其反對要求ニ付テノ陳述ハ申立ニ因リ調書ヲ以テ之ヲ明確ニス

第四百七十一條 訴ヲ起サント欲スル者ハ和解ヲ試ルカ爲メ其請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出スコトヲ得

當事者雙方出頭シ且和解ノ調フトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ニス

和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ直ニ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ其口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ヌ

第三百八十條 第二百二十二條、第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所訴訟手續ニ之ヲ適用セヌ

然レモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限リ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ

第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出スコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルキハ調書ヲ以テ明確ナラシム可シ
和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直ニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲

相手方カ出頭セサルトキ又ハ和解ヲ試ルモ其効ナキトキハ其生シタル費用ヲ訴訟費用ノ一部トシテ處分ス

○日本訴訟法ハ督促手續ノ爲メニ別ニ一編ヲ置カス之ヲ第二編中ノ一節トシテ編入シタルヲ以テ此所ニ操上ケテ對比スルモノト知ルヘシ

第七編 督促手續

第六百二十八條 一定ノ金額ノ支拂若クハ其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付テハ債權者ノ申請ニ因リ條件附ノ支拂命令ヲ發ス

督促手續ハ申請ノ旨趣ニ依ルニ反對給付ヲ爲スニ非サレハ請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若シハ公告ヲ以テ爲ス可キトキハ之ヲ許サス

第六百二十九條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス區裁判所カ第一審ニ於テ事物上無制限ニ管轄權ヲ有スルトキハ通常訴訟手續ヲ以テ提起シタル訴ニ付キ人ノ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第六百三十條 申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコ

相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルキハ此カ爲メニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

第二節 督促手續

第三百八十二條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラヌシテ督促手續ニ依リ條件附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發シテ之ヲ申立ツ

ルヲ得 申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルヲ得サルキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若シハ公示送達ヲ以テ爲ス可キハ督促手續ヲ許サス

第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十四條 支拂命令ヲ發スルノ申請

トヲ要ス

第一 當事者雙方ノ氏名身分又ハ職業及

住所

第二 裁判所ノ表示

第三 請求ノ數額又ハ目的物及ヒ原因ノ

開示

第四 支拂命令ヲ發セシメテノ申請

第六百三十一條 申請カ前諸條ノ規定ニ適合

ヒス又ハ其旨趣ニ依ルニ一般ニ請求ノ理由

ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハルハトキ

ハ其申請ヲ却下ス

申請ハ支拂命令ヲ唯其請求ノ一部ノミニ就

テ發スルコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ却

下ス

却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコト

ヲ得ス

第六百三十二條 支拂命令ニハ第六百三十條

第一乃至第三ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載

シ且其他即時ノ強制執行ヲ避ル爲メニハ送

達ノ日ヨリ經過スルニ週ノ期間内ニ請求并

ニ金額ヲ指示スヘキ訴訟手續費用及ヒ要求

セラレタル利子ニ付テ債權者ヲ満足セシム

ルカ又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債

務者ニ對スル命令ヲ記載ス

ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

其申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原

因ノ表示若シ請求ノ數箇ナルキハ其各

箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表

示

第三 支拂命令ヲ發セシメテノ申立

第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申

請カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨

趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキ

トノ顯ハルルキハ其申請ヲ却下ス

請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコ

ト得サルキハ亦其申請ヲ却下ス然レモ數箇

ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモ

トニ理由アリト見ユルキハ其理由アリト見

ユルモノニ限り申請ヲ許容ス

右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコ

ト得ス然レモ通常ノ訴訟手續ニ依リ訴訟ス

ルヲ妨グルコト無シ

第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審

訊セスシテ之ヲ發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第

二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時

ノ強制執行ヲ避ケント欲セハ此命令送達ノ

日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシム

及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債權

者ニ辨濟ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ

可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ
前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ
二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ
三日マテニ之ヲ短縮スルヲ得

第六百三十三條 支拂命令ヲ債務者ニ送達ス
ルヲ以テ權利拘束ノ効力ヲ生ス

第六百三十四條 債務者ハ執行命令ヲ發セサ
ル間ハ請求又ハ其一分ニ對シ異議ヲ爲スコ
トヲ得

裁判所ハ適當ナル時間ニ爲シタル異議ヲ債
權者ニ通知セサル可ラス又債務者ニ其求メ
ニ依リ適當ナル時間ニ異議ヲ爲シタルコト
ノ證書ヲ交付ス

適當ナル時間ニ爲サ、ル異議ハ之ヲ却下ス
ルコトヲ要セズ

第六百三十五條 支拂命令ハ請求又ハ其一分
ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ爲シタルニ依
リ其効力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ効力ヲ
存續ス

第六百三十六條 請求ニ付キ起スヘキ訴カ區
裁判所ニ屬スル場合ニ於テ適當ナル時間ニ
異議ヲ爲シタルトキハ訴ハ支拂命令ノ送達
ヲ以テ命令ヲ發シタル區裁判所ニ之ヲ起シ
タルモノト看做ス

第三百八十七條 權利拘束ノ効力ハ支拂命令
ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル
支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ
第三百八十八條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書
面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スヲ得

第三百八十九條 債務者カ請求ノ全部又ハ一
分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツルハ
支拂命令ノ効力ヲ失フ然レモ權利拘束ノ
効力ヲ存續ス

數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テ
タルハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相
當スル費用ノ部分ニ付キ効力ヲ有ス

第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テ
タル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ區
裁判所ノ管轄ニ屬スルハ其訴ハ支拂命令
ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモ
ノト看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十

當時者ノ各方ハ口頭辯論ノ爲メ相手方ヲ呼出ヌコトヲ得呼出期間ハ三日以上トス

第六百三十七條 請求ニ付キ起ヌ可キ訴カ地方裁判所ニ屬スル場合ニ於テハ異議ノ申立ヲ通知シタル日ヨリ起算シ六ヶ月ノ期間内ニ其訴ヲ管轄裁判所ニ起サ、ルトキハ權利拘束ノ効力ハ消滅ス

第六百三十八條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ヲ爲シタル場合ニ於テハ起ヌ可キ訴ノ費用ノ一分ト看做ス

第六百三十七條ノ場合ニ於テ適當ナル時間ニ訴ヲ起サ、ルトキハ債權者ハ督促手續ノ

費用ヲ負擔ス

第六百三十九條 支拂命令ハ其假執行ノ宣言前債務者ニ於テ異議ヲ爲サ、ルトキニ限り其命令ニ定メタル期間ノ満了後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス其宣言ハ支拂命令ニ付ヌ可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スヘキ從來ノ訴訟手續費用ヲ掲ケサル可ラス
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第六百四十條 執行命令ハ假執行ヲ宣言シタル闕席判決ニ同シ其命令ニ對シテハ第三百三條乃至第三百十一條ノ規定ニ從ヒ故障ヲ

七條ノ規定ニ從ヒ之ヲ定ム

第三百九十一條 請求ニ付キ起ヌ可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルヲ債權者ニ通知ヌ可シ

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一个月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ササルキハ權利拘束ノ効力ヲ失フ

第三百九十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ヌ可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス

第三百九十三條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルキニ限ル
右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ヌ可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル手續ノ費用ヲ掲ケ可シ
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル闕席判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十五條乃至第二百六

許ス請求カ區裁判所ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス第六百三十七條ニ定メタル期間ハ此場合ニ於テハ故障ヲ許サレタルモノトシテ宣言スル判決ノ確定ヲ以テ始マル

十四條ノ規定ニ從ヒ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十一條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マル

第六百四十一條 異議ヲ爲サル場合ニ於テ支拂命令ニ定メタル期間ノ滿了ヲ以テ始マル可キ六ヶ月ノ期間内ニ執行命令ヲ發センコトヲ申立テサルトキハ支拂命令ハ其効力ヲ失ヒ權利拘束ノ効力モ亦消滅ス執行命令ヲ發センコトノ申立ヲ適當時間ニ爲シタルモ其申請ヲ却下セラルトキハ亦同シ

第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

セシコトノ申請并ニ異議ノ申立ハ謄本ヲ以テ之ヲ他ノ一方ニ通知セヌ口頭上其申立ヲ爲ス場合ニ於テハ調書ヲ作ルコトヲ要セヌ

第六百四十三條 債權者ノ爲メニ支拂命令ヲ發センコトヲ申立ツルトキ又ハ債務者ノ爲メニ支拂命令ニ對シテ異議ヲ爲ストキハ委任ノ證明ヲ要セヌ

第三編 上訴

第一章 控訴

第四百七十二條 控訴ハ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第四百七十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ノ規定ニ從ヒ其裁判ニ對シテ不服ヲ申立ツルコトヲ得サルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第四百七十四條 闕席判決ニ對シテハ其言渡ヲ受ケタル當事者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

故障ヲ許ササル闕席判決ハ懈怠ナカリシコ

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルキハ此限ニ在ラス

第三百九十八條 闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス但故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルキニ限

トテ理由トスルトキニ限り控訴ヲ受ク

第四百七十五條 判決ノ言渡後ニ陳述シタル

控訴權拋棄ノ効力ハ相手方カ其拋棄ヲ承諾

シタルト否トニ關係セス

第四百七十六條 控訴ノ取下ハ被控訴人ノ口

頭辯論ノ始マルマテニ限り其承諾ナクシテ

之ヲ爲ヌコトヲ得

取下ハ口頭辯論ノ際之ヲ陳述セザルトキハ

書面ヲ送達シテ之ヲ爲ヌ其謄本ハ送達ヲ爲

シタル後直ニ裁判所書記課ニ之ヲ納付ス

取下ハ上訴權ヲ喪失シ及ヒ上訴ニ依テ生シ

タル費用ヲ負擔ス可キ義務ヲ生ヌ此効力ハ

相手方ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ之ヲ言渡ス

第四百七十七條 控訴期間ハ一ヶ月トス此期

間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マ

ル

控訴ハ判決ノ送達ト同時ニ之ヲ提起スルコ

トヲ得判決ノ送達前ノ提起ハ無効トス

第四百七十八條 第二百九十二條ニ從ヒ控訴

期間内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタル

トキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對ス

ル控訴ニ付テモ亦追加裁判ノ送達ヲ以テ始

マル

同一ノ當事者ヨリ兩判決(前判決ト追加判

決)ニ對シ控訴ヲ提起シタルトキ其兩控訴

ハ之ヲ併合ス

第四百七十九條 控訴ノ提起ハ書面ヲ送達シ

テ之ヲ爲ヌ

テ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

二六八

第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テ

ハ被控訴人ノ承諾ナクシテ之ヲ取下クルコト

ヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スルノ結果ヲ生

ス

第四百條 控訴期間ハ一ヶ月トス此期間ハ不

變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ

追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルキハ控訴

期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付

テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判

所ニ差出シテ之ヲ爲ヌ

二六九

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 控訴セラルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ控訴ヲ提起スル旨ノ

陳述

第三 控訴ノ口頭辯論ノ爲メ被控訴人ヲ

控訴裁判所ニ呼出スコト

第四百八十條 準備書面ニ關スル一般ノ規定

ハ控訴狀ニモ亦之ヲ適用ス

準備書面タル控訴狀ニハ殊ニ判決ニ對シ如

何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付

キ如何ナル變更ヲ申立ツルヤハ控訴申立并

ニ當事者カ主張セントスル新ナル事實及ヒ

證據方法ヲ掲ク可シ

此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 控訴セラルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定

ニ從ヒ之ヲ作り且判決ニ對シ如何ナル程度

ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル

變更ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ若シ新ニ主

張セントスル事實及ヒ證據方法アルトキハ

其新ナル事實及證據方法ヲモ掲ク可シ

第四百二條 判然許ヌ可カラサル控訴又ハ判

然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經

過後ニ起シタル控訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ

之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ

ヲ得

第四百三條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日

トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第

百九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス

可キ期間ノ催告ニ付テハ第百九十九條ノ規

定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第百三條ノ規定ヲ

適用スルコトヲ得

第四百四條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般

ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ

申立及ヒ其主張セントスル新ナル事實及ヒ

證據方法ヲ掲ク可シ

(第四百八十四條) 被控訴人ハ控訴狀ノ送達

ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スル時間ノ最

初ノ三分二以内ニ準備書面ヲ以テ控訴人ニ

控訴ノ答辯書ヲ送達セシム

此書面ニハ殊ニ被控訴人ノ主張セントスル

申立並ニ新ナル事實及證據方法ヲ掲ク可シ

(日、四〇七)

第四百八十二條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ抛

棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルト

キト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

闕席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツル

コトニ付テノ規定ハ此判決ニ對シ附帶控訴

ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テモ亦之ヲ

適用ス

第四百八十三條 附帶控訴ハ控訴ヲ取下ケ又

ハ許ス可カラサルモノトシテ棄却シタルト

キハ其力ヲ失フ

被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタ

ルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ヲ提起シタルモノ

ト看做ス

第四百八十四條 (日、第四百四條ニ對比ス)

第四百八十五條 他ノ訴訟手續ニハ地方裁判

所ノ第一審ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用

ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ

此限ニ在ラス

第四百八十六條 口頭辯論ハ其爲メニ定メタ

ル期日ニ於テ控訴期間未タ經過セサルトキ

二七二

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ抛棄シ

タルキ又ハ控訴期間ノ經過シタルキト雖モ

附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

闕席判決ニ對シ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立

ツルコトニ付テハ第三百九十八條ノ規定ニ從

フ

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其

効力ヲ失フ

第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄

却シタルキ

第二 控訴ヲ取下ケタルキ

然レモ被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ

爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據

方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ

掲ケタルキハ之ヲ控訴人ニ送達ス可シ(獨、

四八四第二項)

第四百八條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方

裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス

但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此

限ニ在ラス

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタ

ルキハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時

ニ爲スヲ通例トス

第四百十條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴

人ノ控訴期間ノ未タ經過セサルキハ其申立

二七三

ハ被控訴人ノ申立ニ因リ其期間ノ滿了マテ之ヲ延期シ又被控訴人カ判決ニ對シ故障ヲ申立テタルトキハ其故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百八十七條 訴訟ハ控訴裁判所ニ於テハ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百八十八條 當事者ハ其控訴申立ヲ明瞭ナラシメ且不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ審査スル爲メ必要ナル限ハ口頭辯論ノ際控訴ヲ以テ不服申立テラレタル判決並ニ判決前ニ爲シタル裁判及ヒ裁判理由并ニ證據ニ關スル審問調書ヲ演述ヒサル可ラス

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補完ヲ爲サシメ必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシム

第四百八十九條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖トモ之ヲ許サス

第四百九十條 妨訴ノ抗辯ハ當事者カ有効ニ拋棄スルコトヲ得ルモノニシテ且ツ當事者カ其過失ナクシテ第一審ニ於テ之ヲ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ許ス

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テモ亦抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ

ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延期ス

關席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百一十條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百一十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス可シ
演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補完ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシム可シ

第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス

第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

得

第四百九十一條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及證據方法ヲ提出スルコトヲ得

新ナル請求ハ第二百四十條第二及ヒ第三ノ場合ヲ除ク外相殺スルコトヲ得ヘキモノニシテ且當事者カ其過失ナクシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疎明スルトキニ限り之ヲ起スコトヲ許ス

第四百九十二條 當事者カ第二百六十七條ノ規定ニ從ヒ第一審ニ於テ既ニ質問權ヲ喪失シタルキハ第一審ノ訴訟手續ニ關スル規定ノ違背ハ控訴審ニ於テ之ヲ質問スルコトヲ得ス

第四百九十三條 事實證書及ヒ宣誓要求ニ付キ第一審ニ於テ爲サリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ控訴審ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得

第四百九十四條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ控訴審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

第四百九十五條 第一審ニ於テ爲シタル宣誓ノ承諾又ハ反對要求ハ控訴審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

宣誓ヲ命シタル裁判ヲ控訴裁判所ニ於テ理由アリト認ムルトキハ宣誓ヲ爲スコト宣誓ヲ拒ムコト及ヒ宣誓ヲ免除スルコトニ付テモ亦前項ニ同シ

第四百九十六條 假執行ヲ爲スヘカラスト言渡シ又ハ無條件ニテ假執行ヲ爲スヘシト言

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻撃、防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ヘキモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疎明スルキニ限り之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲サリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

渡シタル第一審ノ判決ハ控訴申立ヲ以テ不服ヲ受ケサル部分ニ限リ口頭辯論ニ爲シタル申立ニ因リ控訴裁判所ニ於テ假執行ヲ爲スヘキコトヲ言渡ス

此裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ヌ

第四百九十七條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ期間ニ於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査セサル可ラス此要件ノ一ヲ缺クトキハ控訴ヲ許ス可ラサルモノトシテ棄却ス

第四百九十八條 第一審ノ判決ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限リ變更スルコトヲ許ス

第四百九十九條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ關スル總テノ爭點ニシテ申

立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判必要トスルモノハ第一審ニ於テ此爭點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ササルトキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス

第五百條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ尙ホ

辯論ヲ必要トスルトキニ限リ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス

第一 不服ヲ受ケタル判決ヲ以テ故障ヲ許サレサルモノトシテ棄却シタルトキ

第二 不服ヲ受ケタル判決ヲ以テ妨訴抗辯ノミヲ裁判シタルトキ

第三 原因及ヒ數額ニ付キ爭アル請求ノ場合ニ於テ不服ヲ受ケタル判決ヲ以テ先ツ其請求ノ原因ニ付キ裁判シタルト

第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キ

ヤ否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クキハ判決ヲ以テ控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限リ之ヲ變更スルコトヲ得

第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ關スル總テノ爭點ニシテ申

立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第一審ニ於テ此爭點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ササルトキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス

第四百二十二條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於

テ事件ニ付キ尙ホ辯論ヲ必要トスルキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ナルキ

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シタルモノナルキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタルモノ

キ

第四 不服ヲ受ケタル判決ヲ證書訴訟又

ハ爲替訴訟ニ於テ權利ヲ執行スルコトヲ得ルコトヲ留保シテ言渡シタルトキ

第五 不服ヲ受ケタル判決カ闕席判決ナルトキ

第二ノ場合ニ於テ控訴裁判所ハ總テノ妨訴

抗辯ヲ完結セサル可ラス

第五百一條 第一審ノ訴訟手續ニ重要ナル缺

點アルトキハ控訴裁判所ハ判決及ヒ欠缺アル訴訟手續ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

ナルキ

二八〇

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争ア

ル場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルキ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書

訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ

別訴訟ヲ以テ追行ヲ爲スノ權ヲ留保シタルモノナルキ

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付

テノ規定ニ違背シタルキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第四百二十四條 控訴ヲ理由ナシトスルキハ

判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡スコトヲ得

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變

更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒ防

禦ノ方法ヲ却下スルキハ其防禦ノ方法ヲ主張スルノ權ハ之ヲ被告ニ留保スコトヲ得

判決ニ此留保ヲ掲ケサルキハ第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第五百二條 第二百五十二條ノ規定ニ從ヒ防

禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方法ヲ主張スルノ權ハ之ヲ被告ニ留保ス

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百九十二條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ルコトヲ得

防禦方法ヲ主張シ得ルコトヲ留保シタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

二八一

第五百三條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ訴訟ハ第二審ニ屬ス

爾後ノ訴訟手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルハトキニ限リ前判決ヲ廢棄シ原告ヲ請求ト共ニ却下シ且申立ニ因リ原告ニ對シ其判決ニ基キ被告ノ支拂タルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還スヘキコトヲ言渡シ并ニ費用ニ付キ別ニ裁判ス

第五百四條 第一審ニ於ケル關席訴訟手續ノ規定ハ亦之ヲ準用ス

控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル被控訴人ニ對シテ關席判決ヲ申立ルトキハ確定

シタル事件ノ關係ニ抵觸セサルトキニ限リ控訴人ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白セラレタルモノト看做シ且許サレタル方法ヲ以テ申立テタル證據調ニ付キ豫期ノ結果アリタルモノト看做ス

第五百五條 判決ニ事實ヲ記スルニ方テ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ禁セス

第五百六條 控訴裁判所ノ裁判所書記ハ裁判期日ヲ定ルカ爲メ控訴狀ヲ差出タル後二十四時内ニ第一審裁判所ノ裁判所書記ヨリ訴

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ屬ス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルキハ前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ關席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十九條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ關席判決ノ申立ヲ爲スキハ第一審裁判ノ證據ト爲リタルモノニ抵觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做シ關席判決ヲ爲ス

第四百三十條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得

第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ

訴訟記録ノ送付ヲ求ム

控訴完結ノ後記録ハ控訴審ニ於テ言渡シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ裁判所書記ニ之ヲ返還ス

第二章 上告

第五百七條 上告ハ控訴審ニ於テ上等地方法裁判所ノ言渡シタル終局判決ニ對シ之ヲ爲ス

第五百八條 財産權上ノ請求ニ付テノ訴訟ニ於テハ上訴ニ係ル訴訟物ノ價額千五百「マ」ルリヲ超過スルニアラサレハ上告ヲ許サズ

上訴ニ係ル訴訟物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第九條ノ規定ヲ適用ス

上告人ハ此價額ヲ説明セサル可ラス宣誓ハ

説明ノ方法トシテ之ヲ用フルコトヲ禁ス

第五百九條 左ノ場合ニ於テハ上訴ニ係ル訴訟物ノ價額ニ拘ハラヌ上告ヲ爲スコトヲ得

第一 裁判所ノ管轄違又ハ無訴權又ハ控訴ノ許ヌ可カラサルモノニ關スルトキ

第二 地方裁判所カ訴訟物ノ價額ニ拘ハラヌ專屬管轄權ヲ有スル請求ニ付テノ訴訟ナルトキ

第五百十條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ノ規定ニ從ヒ其裁判ニ對シテ不服ヲ申立ツルコトヲ得サルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 上告

第四百三十二條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シ之ヲ爲ス

第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルハ此限ニ在ラス

第五百十一條 上告ハ獨逸法律又ハ控訴裁判所ノ管轄外ニ効力ヲ及ス法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第五百十二條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第五百十三條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ毎ニ法律ノ違背ニ基クモノト看做ス

第一 判決裁判所ヲ規定ニ從ヒ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ判事ノ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但思避ノ申請ヲ以テ障碍(除外

ノ理由)ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ偏頗ノ恐アル爲メ思避セラレ且思避ノ申請カ理由アリト言渡サレタルニ拘ハラヌ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五 當事者ノ一方カ訴訟手續ニ於テ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシトキ但訴訟ヲ爲スコトヲ明諾又ハ默諾セシトキニ限ル

第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲シタルトキ

第四百三十四條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルキハ法律ニ違背シタルモノトス

第四百三十六條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但思避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除外ノ理由

ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ思避セラレ且思避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラヌ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシトキ

第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲シタルトキ

第七 裁判ニ理由ヲ付セサルトキ

第七 裁判ニ理由ヲ付セザルトキ

第五百十四條 上告期間ハ一个月トス其期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル上告ハ判決ノ送達ト同時ニ之ヲ提起スルヲ得判決ノ送達前ニ爲ス提起ハ無効トス

第五百十五條 上告ノ提起ハ書面ヲ送達シテ之ヲ爲ス此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 上告セラル、判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ上告ヲ提起スル旨ノ陳述

陳述

第三 上告ノ口頭辯論ノ爲メ上告裁判所ニ被上告人ヲ呼出スコト

第五百十六條 準備書面ニ關スル一般ノ規定

ハ上告狀ニモ亦之ヲ適用ス(日、四三八末項)

準備書面タル上告狀ニハ殊ニ判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付如何ナル變更ヲ申立ルヤ〔上告申立〕ヲ掲ケ且上告申立ニ理由ヲ付スルカ爲メ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一 法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示

第二 訴訟手續ニ付テノ法律ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示

第三 法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若ク

第四百三十七條 上告期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

第四百三十八條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

此上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 上告セラルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

此他上告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り特ニ判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ且法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルキハ其法則ノ表示又ハ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若クハ遺脱シ若クハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルキハ其事實ノ表示ヲ掲ク可シ(獨、五一六)

第四百三十九條

上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルキハ上告

ハ遺脱シ若シハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其事
實ノ表示

右ノ外上告狀ニハ一定ノ金額ニ非サル上訴
ニ係ル訴訟物件ノ價額ヲ記載スヘシ但上告
ノ許否カ其價額ヲ條件ト爲ストキニ限ル

第五百十七條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期
日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テ
ハ第二百三十四條ノ規定ヲ準用ス

ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セザリシ
コトヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由
ヲ以テ辯解シタルキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期
日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ
第九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出
ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第九十九條ノ
規定ヲ適用ス(獨、五一九第一項)
前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ
適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル

一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ
掲ク可シ

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲ス
コトヲ得
此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用
ス

第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨
ノ陳述ヲ掲ケタルキハ之ヲ上告人ニ送達ス
可シ(獨、五一九第二項)

第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ
地方裁判所ノ第一審訴訟手續ノ規定ヲ準用

第五百十八條 被上告人ハ上告ニ附帶スルコ
トヲ得此附帶ニ付テハ被控訴人控訴ニ附帶
スルニ付テノ規定ヲ準用ス

第五百十九條 被上告人ハ上告狀ノ送達ト口
頭辯論ノ期日トノ間ニ存スル時間ノ最初ノ
三分ノ二以内ニ準備書面ヲ以テ上告人ニ上
告ノ答辯書ヲ送達ス(日、四四〇第一項)
此書面ニハ殊ニ申立及ヒ附帶ノ場合ニ於テ
ハ其理由ヲ第五百十六條ノ規定ニ從テ記載
スヘシ(日、四四三)

第五百二十條 其他ノ訴訟手續ニハ地方裁判
所ノ第一審ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用

ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ
此限ニ在ラス

第五百二十一條 控訴審ノ訴訟手續ニ關スル
規定ノ違背ハ當事者カ第二百六十七條ノ規
定ニ從ヒ控訴審ニ於テ既ニ質問權ヲ失フマ
ルトキハ上告審ニ於テ復之ヲ質問スルコト
ヲ得ス

第五百二十二條 上告裁判所ノ調査ハ當事者
ノ爲シタル申立ノミニ施行ス

第五百二十三條 假執行ヲ爲スヘカラスト言
渡シ又ハ條件ヲ付シテ假執行ヲ言渡シタル
控訴裁判所ノ判決ハ上告申立ヲ以テ不服ヲ
申立ラレサル部分ニ限リ口頭辯論中ニ爲シ
タル申立ニ因リ上告裁判所ニ於テ假執行ヲ

爲スヘキコトヲ言渡ス

第五百二十四條 不服ヲ申立ラレタル判決ニ
於テ裁判上確定シタル事實ハ上告裁判所ノ
裁判ニ付テノ標準ト爲ス其他ハ第五百十六
條第二第三ニ記載シタル事實ニ限リ之ヲ斟酌
スルマコト得

第五百二十五條 第五百十一條ニ從ヒ法律ノ
違背ヲ上告ノ理由トスルコトヲ得ヘカ拉萨
ル法律ノ存立及ヒ趣旨ニ付テノ控訴裁判所
ノ裁判ハ上告ニ因テ爲ス裁判ニ付テノ標準
ト爲ス

第五百二十六條 (日、四百五十三條ニ對比ス)
第五百二十七條 上告ヲ理由アリト認ル部分
ニ限リ不服ヲ申立ラレタル判決ヲ破毀ス

ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ
此限ニ在ラス

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シ
タル申立ノミニ付キ調査ヲ爲ス

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ
付キ控訴裁判所カ其裁判ノ憑據トシタル事
實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四百三十八條
第三項ニ掲ケタル事實ニ限リ之ヲ斟酌スル
コトヲ得

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルキハ
證據調ヲ必要トスルキハ上告裁判所ハ之ヲ
命ス可シ

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルキハ
不服ヲ申立テラレタル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ノ欠缺ノ爲メ判決ヲ破毀スルトキハ同時ニ欠缺アル部分ニ限リ訴訟手續ヲ破毀ス

第五百二十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻ス

控訴裁判所ハ破毀ノ基本ト爲リタル法律上ノ判断ヲ其裁判ノ基本ト爲サシムル可ラス(日、四五〇)

但上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判セサル可ラス(日、四五二)

第一 確定シタル事實ノ關係ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲メニミ判決ノ破毀ヲナシ且確定シタル事實

ノ關係ニ依ルニ事件カ終局裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二 裁判所ノ管轄違ナル爲メ又ハ無訴權(非管轄)ノ爲メ判決ヲ破毀スルトキ

第一第二ノ場合ニ於テ事件ニ付テ言渡スヘキ裁判ヲ爲スニ付キ第五百十一條ニ從

ヒ法律ノ違背ヲ上告ノ理由ト爲スコトヲ得サル法律ノ適用カ問題ナルトキハ更ニ

辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻スコトヲ得

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルキハ其違背シタル部分ニ限リ訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除クノ外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送ス可シ

事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ當リ提出スル

コトヲ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯論ニ際シ提出スルノ權利アリ

第四百五十條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係

ル判断ニシテ判決ヲ破毀スルノ基本トシタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト

爲スノ義務アリ(獨、五二八第二項)

第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲スコシ(獨、五二八第三項以下)

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲メニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スル

キ

第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲メニ判決ヲ破毀スルキ

(第五百二十六條) 裁判カ裁判ノ理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルコトノ明ナルトキハ上告ヲ棄却ス

第五百二十九條 闕席判決ニ對スル不服ノ申立、上訴ノ拋棄及ヒ取下、口頭辯論ノ延期、妨訴抗辯ニ付テノ辯論、上訴許否ノ調査、口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述及ヒ訴訟記録ノ取寄並ニ返還ニ關シ控訴ニ施行スル規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第四百五十二條 上告ヲ理由ナシトスルキハ之ヲ棄却ス可シ

第四百五十三條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルキハ上告ヲ棄却ス可シ

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 闕席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トヲ同時ニ爲シタルキノ訴訟手續

第四 口頭辯論ノ延期

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル

裁判ヲ爲ス可カラサルコト

第八 記録ノ送付並ニ返還

第三章 抗告

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其他此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ

第三章 抗告

第五百三十條 抗告ノ上訴ハ此法律ニ於テ殊ニ掲ケタル場合及ヒ訴訟手續ニ關スル申請ヲ却下スル所ノ豫メ口頭辯論ヲ要セサル裁判ニ對シ之ヲ爲ス

第五百三十一條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所之ヲ裁判ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ新ナ

ル獨立ノ抗告理由アルニ非レハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第五百三十二條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ言渡セシ裁判所又ハ其裁判ヲ言渡セシ裁判長ノ屬スル裁判所ニ之ヲ提出ス抗告ハ急迫ナル場合ニ於テハ抗告裁判所ニモ亦之ヲ提出スルコトヲ得(日、四六一) 其提出ハ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス其提出ハ訴訟カ區裁判所ニ屬スルトキ又ハ屬シタルトキ又ハ抗告カ訴訟上救助ニ關スルトキ又ハ證人若クハ鑑定人ヨリ抗告ヲ爲ストキハ亦裁判所書記ノ調書ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百三十三條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據

ニ憑據スルヲ得

第五百三十四條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ抗告ヲ理由アリト認ルトキハ之ヲ更正ス其他ノ場合ニ於テハ抗告ヲ一週ノ滿了前ニ抗告裁判所ニ送付ス

第五百三十五條 抗告ハ第三百四十五條第三百五十五條第三百七十四條第五百七十九條第六百十九條ニ掲ケタル裁判ニ對シテ之ヲ爲ストキニ限リ執行停止ノ効力ヲ有ス 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所

新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルキニ非サレハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス 訴訟カ區裁判所ニ屬スル若クハ管テ屬シタルキ又ハ證人鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出スル義務アリトノ宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲スルハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據

方法ヲ以テ憑據ト爲スコトヲ得

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルキハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限リ執行停止ノ効力ヲ有ス 然レモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判ア

又ハ裁判長ハ其裁判執行ノ中止ヲ命スルヲ得

抗告裁判所ハ裁判前ニ假命令ヲ發スルコトヲ得殊ニ不服ヲ申立ラレタル裁判ノ執行ノ中止ヲ命スルヲ得

ルマテ其執行ノ中止ヲ命スルヲ得
抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ命スルヲ得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限リ直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スヲ得(獨、五三二第一項)

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルヲ得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第五百三十六條 抗告ニ付テノ裁判ハ豫メ口頭辯論ヲシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所カ書面上ノ陳述ヲ命スルトキハ其陳述ハ抗告ヲ裁判所書記ノ調書ヲ以テ提出スルコトヲ許ス場合ニ於テ裁判所書記ノ調書ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ通例トス

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルヲ得
陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲メニ當事者ヲ呼出スヲ得

第五百三十七條 抗告裁判所ハ職權ヲ以テ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ調査ス此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ許スヘカラサルモノトシテ棄却ス

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ
若シ此要件ノ一ヲ缺クキハ抗告ヲ不適法ト

第五百三十八條 抗告裁判所カ抗告ヲ理由アリト認ルトキハ抗告ヲ受ケタル裁判ヲ言渡セシ裁判所又ハ裁判長ニ必要ナル命ヲ委任スルコトヲ得

第五百三十九條 受命判事又ハ受託判事ハ裁判所書記ノ裁判ノ變更ヲ求ルトキハ受託裁判所ノ裁判ヲ求ム
抗告ハ受託裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ許ス

第一項ノ規定ハ帝國裁判所(大審院)ニモ亦之ヲ適用ス

第五百四十條 即時抗告ノ場合ニ付テハ左ノ特別ノ規定ヲ適用ス
抗告ハ二週ノ不變期間内ニ之ヲ提出セサル可ラス其期間ハ裁判ノ送達ヲ以テ始ル第三百一條及ヒ第八百二十九條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヲ以テ始ル抗告裁判所ニ爲ス提出ハ急迫ノ場合ト認メサルトキト雖モ不變期間ノ保存ニ十分ナリトス取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ノ要件アルトキハ抗告ハ此不變期間滿了ノ後ト雖モ其訴ノ爲メニ存スル不變期間内ニ之ヲ申立ルコトヲ得
裁判所ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立テラレタル

シテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ通知ス可シ

第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受託裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ
抗告ハ受託裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ
抗告ハ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲ス可シ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マリ第二百五十三條、第六百八十條及ヒ第七百六十九條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マル抗告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルハ急迫ナラスト認メタル場合ニ於テモ亦不變期間ヲ保存ス
再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルハ不變期間ノ滿了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

處分ヲ變更スルノ權ナシ

第五百三十九條ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ニ應スルコトヲ欲セサルトキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス

前條第一項ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ヲ正當ト認メサルキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス可シ

第四編 再審

第五百四十一條

確定終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟手續ハ取消ノ訴及ヒ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得

同一ノ當事者又ハ當事者雙方カ両訴ヲ提起スルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ取消ノ訴ニ付テ確定裁判アルマテ之ヲ中止ス

第五百四十二條 取消ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ爲ス

第一 判決裁判所ヲ規定ニ從ヒ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ判事ノ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタ

第四編 再審

第四百六十七條

確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得

當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ取消ノ訴ニ付テノ裁判カ確定スルマテ之ヲ中止ス可シ

第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但

ルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ此
障得ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキ
ハ此限ニ在ラズ

第三 判事カ偏頗ノ恐アル爲メ忌避セラ
レ且忌避ノ申請カ理由アリト旨渡サレ
タルニ拘ハラヌ裁判ニ參與シタルトキ

第四 當事者ノ一方カ訴訟手續ニ於テ法
律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシ但

訴訟ヲ爲スコトヲ明諾又ハ黙諾セサリ
シトキニ限ル

第一第三ノ場合ニ於テ上訴ヲ以テ無効ヲ主
張スルコトヲ得ヘカリシトキハ訴ヲ許サヌ

第五百四十三條 原狀回復ノ訴ハ左ノ場合ニ
於テ之ヲ爲ヌ

第一 相手方カ判決ノ憑據ト爲リタル當

事者ノ宣誓ノ際故意又ハ過失ヲ以テ宣
誓義務ニ違背スル罪ヲ犯シタリシトキ

第二 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造
又ハ變造ナリシトキ

第三 證人又ハ鑑定人カ判決ノ憑據ト爲
リタル證書又ハ鑑定ニ付テノ宣誓ノ際

故意又ハ過失ヲ以テ宣誓義務ニ違背ス
ル罪ヲ犯シタリシトキ

第四 當事者ノ代理人又ハ相手方又ハ其
代理人カ訴訟ニ關シ刑事訴訟手續ニ依

リ公ノ刑ヲ以テ罰セラルヘキ行爲ノ影
響ヲ判決ニ及ホシタルトキ

第五 訴訟ニ關シ當事者ニ對シ其職務上

忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由
ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ此限
ニ在ラズ

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ
理由アリト認メラレタルニ拘ハラヌ裁
判ニ參與シタリシトキ

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ
法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシトキ

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ
故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取
消ノ訴ヲ許サヌ

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復
ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違

背シタル罪ヲ訴訟ニ關シ犯シタル判事
カ裁判ニ參與シタリシトキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若
クハ訴訟代理人又ハ相手方若クハ其法

律上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラ
ル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシ
トキ

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造
又ハ變造ナリシトキ

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又

ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ
因リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシトキ

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判

ノ義務ニ違背スル罪ヲ犯シタル刑事カ
判決ニ參與シタルトキ但其違背カ刑事
訴訟手續ニ依リ公ノ刑ヲ以テ罰セラル
ヘキトキニ限ル

第六 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判
決カ他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢
棄若クハ破毀セラレタルトキ

第七 當事者ニ左ノ場合アルトキ

イ 同一ノ事件ニ付キ言渡シタル前確
定判決ヲ發見シ又ハ使用スルコトヲ
得ルトキ

ロ 自己ノ利益ト爲ル裁判ヲ受ケタル
ヘキ他ノ證書ヲ發見シ又ハ使用スル
コトヲ得ルトキ

此規定ハロニ記載シタル場合ニ於テ不服ヲ

申立ラレタル判決カ相手方ノ宣誓ニ依リ其

事實又ハ其反對ヲ證明シテ認メタル理

由ニ基シトキハ之ヲ適用セズ

第五百四十四條 前條第一號乃至第五號ノ場

合ニ於テハ原狀回復ノ訴ハ罰セラルヘキ行

爲ニ付テ判決カ確定トナリタルトキ又ハ證

據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開

始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り之ヲ

爲ヌ(日、四六九末項)

原狀回復ノ訴ノ理由ト爲ル事實ノ證據ハ宣

誓要求ヲ以テ之ヲ舉ルコトヲ得ヌ

第五百四十五條 原狀回復ノ訴ハ當事者自己

ノ過失ナクシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障

決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決
ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタリシ
トキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付
テノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモ
ノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレ
タル判決ト抵觸スルトキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ
以前ニ提出スルヲ得サリシ證書ニシテ
原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判
ヲ爲ヌニ至ラシム可キモノヲ發見シタ
ルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル
可キ行爲ニ付テ判決カ確定ト爲リタルトキ又

ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續

ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り再

審ヲ求ムルコトヲ得(獨、五四四)

第四百七十條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被

告カ自己ノ過失ニ非ヌシテ前訴訟手續ニ於

又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り之ヲ爲ヌ

第五百四十六條 不服ヲ申立ラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級裁判所ノ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ訴訟ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立ラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル

第五百四十七條 訴ニ付キ專ラ管轄權ヲ有スル裁判所ハ第一始審ニ於テ判決シタル裁判所トヌ不服ヲ申立ラレタル判決又ハ不服ヲ申立ラレタル數個ノ判決ノ一ノミカ控訴裁判所ニ於テ言渡サレタルトキ又ハ上告審ニ

於テ言渡シタル判決カ第五百四十二條第一乃至第三第六第七ニ依リ不服ヲ申立ラレタルトキハ控訴裁判所トヌ上告審ニ於テ言渡シタル判決カ第五百四十二條第五百四十三條第四第五ニ依リ不服ヲ申立ラレタルトキハ上告裁判所トヌ

訴ヲ執行命令ニ對シテ爲シタルトキハ其訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ニ專屬ス其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ其請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第五百四十八條 訴訟ノ提起及ヒ其他ノ訴訟手續ニハ普通ノ規定ヲ適用ス但此法律ノ規定ニ於テ差異ノ生セサルモノニ限ル

テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り之ヲ爲ヌコトヲ得

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルキニ限ル

第四百七十二條 再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス
同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級裁判所又一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決

ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス
督促手續ニ依テ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルモハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ヌ可

第五百四十九條 訴ハ一月ノ不變期間ノ滿了前ニ之ヲ提起セサル可ラス

此期間ハ當事者カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル但判決ノ確定前ニハ始マラサルモノトス判決確定ノ日ヨリ起算シテ五ケ年ノ滿了後ハ訴ヲ許サス

前項ノ規定ハ代理ナキコトヲ理由トスル取消ノ訴ニハ之ヲ適用セス訴ノ提起ノ期間ハ當事者又ハ訴訟能力ナキ場合ニ於テハ其法律上代理人ニ判決ヲ送達シタル日ヲ以テ始マル

第五百五十條 訴ニハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ヲ受ル判決及ヒ其訴ノ執レヲ提起スルヤノ陳述ヲ具備スルコトヲ要ス

第五百五十一條 準備書面タル訴狀ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ

- 第一 不服ノ理由ノ表示
- 第二 其理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明ニスル事實ニ付テノ證據方法ノ開示
- 第三 如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立ラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀セシムコトヲ申立ルヤ且本案ニ於テ如何ナル他ノ裁判ヲ申立ルヤニ付テノ陳述(日、四七五末項)

原狀回復ノ訴ヲ提起スル書面ニハ其憑據ト

キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス
第四百七十四條 訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ

此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シテ五ケ年ノ滿了後ハ訴ヲ爲スヲ得ズ
前二項ノ確定ハ第四百六十八條第四號ノ場合ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第四百七十五條 訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

- 第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決ノ表示
 - 第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述
- 此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且不服ノ理由ノ表示、此理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テノ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立ヲモ掲ク可シ(獨、五五一)

爲ル證書ノ原本又ハ謄本ヲ添付ス其證書ヲ
原告ノ手ニ存セサルトキハ原告ハ其證書ヲ
取寄スルニ付キ如何ナル申立ヲ爲サント欲
スルヤヲ陳述ス

第五百五十二條 裁判所ハ職權ヲ以テ訴ヲ許
ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ期間ニ
於テ提起シタルヤ否ヤヲ調査ス其要件ノ一

ヲ缺クトキハ訴ヲ許ス可カラサルモノトシ
テ之ヲ却下ス

訴ヲ不變期間ノ滿了前ニ爲シタルコトヲ明
ニスル事實ハ之ヲ疎明セサル可ラス(日、四
七七)

第五百五十三條 本案ハ不服ノ理由ニ關スル
部分ニ限り更ニ之ヲ辯論ス
裁判所ハ再審ノ理由及ヒ許否ニ付テノ辯論
及ヒ裁判ヲ本案ノ辯論前ニ爲スコトヲ命ス
ルコトヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯
論ハ之ヲ再審ノ理由及ヒ許否ニ付テノ辯論
ノ續行ト看做ス
訴ヲ管轄スル上告裁判所ハ再審ノ理由及ヒ
許否ニ付テノ辯論ヲ完結セサル可ラス其完

第四百七十六條 判然許ス可カラサル訴又ハ
判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ
經過後ニ起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ
之ヲ却下ス可シ
此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス可
ヲ得

第四百七十七條 原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於
テ相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラヌ再審ヲ求
ムル理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニ
スル事實ヲ疎明ス可シ(獨、五五二第二
項)

第四百七十八條 許ス可カラサル訴又ハ法律
上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ
起シタル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法

トシテ之ヲ棄却ス可シ

第四百七十九條 本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判
ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限り更ニ
之ヲ爲ス可シ
裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ヲ求ム
ル理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス
コトヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯論ハ
再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付テノ辯論ノ
續行ト看做ス

第四百八十條 原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變

結カ係争事實ノ確定及ヒ斟酌ニ繫ルトキト
雖モ亦同シ(日、四八一)

更ハ相手方カ再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更
ヲ申立テタルトニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得
ヌ

第四百八十一條 訴カ上告裁判所ニ屬スルト
ハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許
否ニ付テノ辯論ノ完結カ係争事實ノ確定及
ヒ斟酌ニ繫ルトト雖モ其完結ヲ爲ス可シ
(獨、五五三末項)

第五百五十四條 上訴ハ訴ヲ取扱ヒタル裁判
所ノ裁判ニ對シ一般ニ爲ヌコトヲ得ルトキ
ニ限り之ヲ許ス

第四百八十二條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シ
タル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲ヌコトヲ得
ヘキトニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十三條 第三者カ原告及ヒ被告ノ共
謀ニ因リ第三者ノ債權ヲ詐害スルノ目的ヲ
以テ判決ヲ爲サシメタリト主張シ其判決ニ

對シ不服ヲ申立ツルトキハ原狀回復ノ訴ニ因
レル再審ノ規定ヲ準用ス
此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト
爲ヌ

第五編 證書及ヒ爲替訴訟

第五百五十五條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代
替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ
目的トスル請求ハ其請求ノ理由タル總テノ
必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得
ルトキハ證書訴訟ニ於テ之ヲ主張スルコト
ヲ得

第五百五十六條 訴ニハ證書訴訟ニ於テ訴ヲ
爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケルコトヲ要ス證書ハ原本
又ハ其謄本ヲ以テ訴狀ニ添フルコトヲ要ス
第五百五十七條 防訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯
論ヲ拒ムコトヲ許サス但裁判所ハ職權ヲ以
テモ亦其抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命ス
ルコトヲ得

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代
替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ
目的トスル請求ハ其請求ヲ起スノ理由タル
總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコ
トヲ得ヘキキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スル
コトヲ得

第四百八十五條 訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴
フル旨ノ陳述ヲ掲ケ且證書ノ原本又ハ謄本
ヲ添フルコトヲ要ス
第四百八十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ
基キ之ヲ拒ムコトヲ得然レモ裁判所ハ申立
ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ
分離ヲ命スルコトヲ得

第五百五十八條 反訴ハ之ヲ爲ス可キヲ得ス

證書ノ真正ナルコト又ハ真正ナラサルコト并ニ第五百五十五條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ證書及ヒ宣誓要求ノミヲ證據方法トシテ之ヲ許ス

證書證據ノ申出ハ證書ノ提出ノミヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

宣誓ハ證據決定ヲ以テ之ヲ命ス

第五百五十九條 原告ハ被告ノ承諾ヲ要スルコトナクシテ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴訟ヲ通常訴訟手續ニテ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第五百六十條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ自然ニ又ハ被告ノ抗辯ニ依リ理由ナキコトノ

顯ハルハトキニ限り原告ヲ請求ト共ニ却下ス

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ原告ノ義務タル證據ヲ證書訴訟ニ於テ許サレタル證據方法ヲ以テ申出テヌ又ハ其證據方法ヲ以テ完全ニ擧ケサルハ其撰ヒタル訴訟ノ種類ニ於テ爲スコトヲ許サレサルモノトシテ却下セラル口頭辯論ノ期日ニ被告カ出頭セサルトキ又ハ被告カ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許サ、ル異議ヲ以テノミ訴ニ對シ抗辯シタルトキ亦同シ

第五百六十一條 被告ノ異議ハ被告ノ義務タル證據ヲ證書訴訟ニ於テ許サレタル證據方法ヲ以テ申出テヌ又ハ其證據方法ヲ以テ完

第四百八十七條 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得ス

證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ證書ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得

第四百八十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至

ルマテハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第四百八十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見ユ又ハ被告ノ抗辯ニ依リ理由

ナシト見ユルキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テヌ又ハ完全ニ之ヲ擧ケサル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルト雖此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十條 證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テヌ又ハ完全ニ之ヲ擧ケサルハ被告ノ異議ハ證

全ニ毀テサルトキハ之ヲ證書訴訟ニ於テ爲
スコトヲ許サレサルモノトシテ却下ス

第五百六十二條 主張シタル請求ヲ争ヒタル
被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ル總テノ場合ニ於
テ其權利ノ行使ヲ留保ス

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百九十
二條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ申立ツルコ
トヲ得

權利ノ留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制
執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第五百六十三條 被告ニ其權利ノ行使ヲ留保
スルトキハ訴訟ハ通常訴訟手續ニ於テ屬
ス

此訴訟手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求

ノ理由ナカリシコトノ顯ハルハトキハ前判
決ヲ廢棄シ原告ヲ請求ト共ニ却下シ且其生
シタル費用ノ全部又ハ一部ノ辨濟并ニ申立
ニ依リ判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付
シタルモノノ返濟ヲ原告ニ言渡ス

此訴訟手續ニ於テ當事者ノ一方カ出頭セザ
ルトキハ關席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第五百六十四條 第五百二條第五百三條ノ規
定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第五百六十五條 證書訴訟ニ於テ手形規則ノ
所謂手形ニ因ル請求ヲ主張スル〔爲替訴訟〕
トキハ以下ノ特別ノ規定ヲ適用ス

書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下
ス可シ

第四百九十一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル
被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合
ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十
二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコ
トヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ
付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第四百九十二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シ
タルキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ屬
ス

此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請

求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルキハ前判決
ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生シシメ
タル費用ノ全部又ハ一部ノ辨濟ヲ原告ニ言
渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給
付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言
渡ス可シ

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサル
キハ關席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百九十三條 第四百二十六條及ヒ第四百
二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第四百九十四條 商法ニ規定シタル爲替證券
ニ因ル請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルキハ
爲替訴訟トシテ以下二條ニ掲ケル特別ノ規
定ヲ適用ス

第五百六十六條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所并ニ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヘラルハトキハ支拂地ノ裁判所ノ外被告ノ一人カ普通裁判籍ヲ有スル裁判所各之ヲ管轄ス

第五百六十七條 訴狀ニハ爲替訴訟ニ於テ訴フル旨ヲ掲グルコトヲ要ス

就審期間ハ訴ヲ裁判所ノ所在地ニ於テ送達スルトキハ二十四時以上裁判所管轄内ノ他ノ地ニ於テ送達スルトキハ三日以上獨逸國內ノ他ノ地ニ於テ送達スルトキハ一週以上トス

第八篇 強制執行

第一章 總則

第六百四十四條 強制執行ハ確定シタル終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因リテ之ヲ爲ス

婚姻事件ニ於ケル判決ハ假執行ヲ宣言スルコトヲ許サス

第六百四十五條 判決ノ確定ハ許サレタル上訴ノ提起又ハ許サレタル故障ノ申立ニ付キ定メタル期間ノ滿了前ニハ生セス其確定ハ適當ノ時間ニ上訴ヲ提起シ又ハ故障ヲ申立ツルニ因リ遮斷セラル

第六百四十六條 判決確定ニ付テノ證明書ハ訴訟記録ニ基キ第一審ノ裁判所書記之ヲ付

第四百九十五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ク可キキハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所各之ヲ管轄ス

第四百九十六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ掲グルコトヲ要ス

訴ノ許ス可キモノナルキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム
口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナクモ二十四時ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第六編 強制執行

第一章 總則

第四百九十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因テ之ヲ爲ス

第四百九十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ滿了前ニハ確定セサルモノトス
判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間内ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムルハ第一審裁判所

與ス訴訟カ上級審ニ繫屬スル間ハ其上級審ノ裁判所書記之ヲ付與ス判決ニ對シ上訴ヲ提起セサリシ場合ニアラサレハ其證書ヲ付與スルコトヲ得サルトキニ限リ上訴ヲ管轄スル裁判所ノ裁判所書記カ不變期間内ニ期日ヲ定ル爲メ書面ヲ提出セサリシコトニ付キ作リタル證書ヲ以テ足ル

第六百四十七條 原狀回復又ハ再審ヲ申立ツルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメシテ強制執行ヲ一時停止スルコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ爲スコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立

テシメテ其爲シタル強制處分ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

保證ヲ立テシメシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ償フコト能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ説明スルトキニ限リ之ヲ許ス右裁判ハ豫メ口頭辯論ナシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第六百四十八條 左ノ判決ニ付テハ申立ナキモ假執行ノ宣言ヲ爲ス

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決〔第二百七十八條〕

第二 條件付終局判決ニ掲ケタル結果ヲ言渡ス判決

ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス訴訟カ尙ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與スルコトヲ得サルキニ限リ上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル證明書ヲ以テ足ル

第五百條 原狀回復又ハ再審ヲ求ムルノ申立アルキハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメシテ強制執行ヲ一時停止ス可キヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ爲スコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立テ

シメテ其爲シタル強制處分ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

保證ヲ立テシメシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ償フコト能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ證明スルキニ限リ之ヲ許ス右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百一條 左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決

第二 證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決

第三 同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被

第三 同一審ニ於テ同一ノ當事者ニ對シ
本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ

闕席判決

第四 證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡
ス判決

第五 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第六 養料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決但

養料カ訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前
最後ノ三個月間ノ爲メニ支拂ヘキモノ

ナルトキニ限ル

第六百四十九條 判決ハ左ノ場合ニ於テハ申

立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス

第一 住家其他ノ建物ノ賃借人ト賃借人
トノ間ニ於テ其引渡、使用、及ヒ明渡并

ニ賃借人カ賃借シタル場所ヘ持込ミタ
ル物件ノ留置ニ付キ生シタル訴訟

第二 雇主ト雇人トノ間及ヒ工業主人ト

勞役者トノ間ニ於テ其雇入及ヒ勞役ノ
關係ニ付キ生シタル訴訟并ニ營業規則

第百八條ニ掲ケタル訴訟但雇入勞役又
ハ見習ノ關係中ニ生シタルモノニ限ル

第三 旅客ト旅店主人若クハ運送人船長

筏師若クハ乗船港ニ於ケル移住世話人
トノ間ニ於テ宿料運送料船賃旅客及ヒ

其荷物ノ運送ニ關シ又ハ荷物ノ喪失及
ヒ損害ニ關シ生シタル訴訟并ニ旅客ト

手職人トノ間ニ於テ旅行ニ因リ生シタ
ル訴訟

告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又
ハ其後ノ闕席判決

第四 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五 養料ヲ支拂フノ義務ヲ言渡ス判決
但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後

ノ三箇月間ノ爲メニ支拂フ可キモノナ
ルキニ限ル

第五百二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假

執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル
部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ

修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所
持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルトニ關シ賃

借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第二 占有ノミニ係ル訴訟

第三 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一箇年
以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅
店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅

人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟
イ 賄料又ハ宿料旅人ノ運送料又ハ之

ニ伴フ手荷物ノ運送料
ロ 旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送

人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手
荷物、金錢又ハ有價物

第四 其他ノ財産權上ノ請求ニシテ判決ノ目的カ金錢又ハ價額ニ於テ三百、マルクヲ超過セサルモノ但其目的ノ價額ニ付テハ第三條乃至第九條ノ規定ヲ適用ス

第六百五十條 判決ノ執行ノ中止カ債權者ニ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ損害ヲ生スヘキコトヲ疏明スルトキ又ハ債權者カ執行前ニ保證ヲ爲スコトヲ申出ルトキハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス

第五 其他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ二十圓ヲ超過セサル訴訟但其物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ適用ス

第五百三條 前二條ニ掲ケタル外左ノ場合ニ於テハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限リ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得
第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルキ
第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ損害ヲ受ク可キコトヲ疏明スルキ

第六百五十一條 判決ノ執行カ債權者ニ償フ可カラサル損害ヲ生ス可キコトヲ疏明スルトキ第六百四十八條ノ場合ニ於テハ債權者ノ申立ニ因リ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコトヲ宣言ス第六百四十九條第六百五十條ノ場合ニ於テハ債權者ノ申立ヲ却下ス

第六百五十二條 裁判所ハ申立ニ因リ假執行ヲ豫シメ保證ヲ立ツルト否トニ懸ラシムルコトヲ得

裁判所ハ債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申出サルトキハ申立ニ因リ債權者ニ

第五百四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルヲ得サル損害ヲ受ク可キコトヲ疏明シタルキハ其申立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲スコトヲ得
第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコトヲ得
第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スルコトヲ得

第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ債權者豫メ保證ヲ立ツルコトヲ得ハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ得
債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申出

保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カル、コトヲ許ス

第六百五十三條 第六百四十九條乃至第六百五十二條ニ掲ケタル申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス

第六百五十四條 判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ申立ヲ看過シタルトキ又ハ申立ナクシテ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テ假執行ニ付テノ裁判ヲ爲サ、ルトキハ判決ヲ補充スル爲メ第二百九十二條ノ規定ヲ適用ス

第六百五十五條 假執行ハ本按ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄シ若クハ變更スル判決ノ言渡ヲ以テ其廢棄又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ效力ヲ失フ
假執行ノ宣言アリタル判決ヲ廢棄シ又ハ變更スルキハ被告ノ申立ニ因リ判決ニ基キ被告ノ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ返濟ヲ原告ニ言渡ス

テサルキハ債務者ノ申立ニ因リ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カルルヲ許ス可シ

第五百六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ
第五百七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ掲ク可シ

第五百八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テ假執行ニ付テノ裁判ヲ爲ササルキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債權者ノ申立ヲ看過シタルキハ第二百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スヲ得
第五百九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ

假執行ノ宣言ナカリシモノ又ハ條件附ノ假執行ノ宣言アリタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ申立テサル部分ニ限リ口頭辯論ノ進行中ニ爲シタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ付ス可シ
第五百十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スル判決ノ言渡シアルキハ假執行ハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ效力ヲ失フ
假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スルキハ判決ニ基キ被告ノ支拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス可シ

第六百五十六條 控訴審ニ於テハ申立ニ依リ先ツ假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百八十六條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

控訴審ニ於テ假執行ニ付キ言渡シタル判決ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ス
第六百五十七條 假執行ヲ宣言シタル判決ニ對シテ故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキハ第六百四十七條ノ規定ヲ準用ス

第六百五十八條 登記簿又ハ書入質帳ニ登記スルノ言渡ヲ爲シタルキ假執行ヲ宣言シタル判決ハ登記ヲ請求スルノ權ヲ擔保スル爲メ規定シタル方式「豫防記入、異議ノ記入、差押處分及處分ノ制限等」ニ從ヒ登記ヲ爲

ストキニ限り之ヲ執行スルコトヲ許ス

第六百五十九條 第六百五十二條第二項ニ從ヒ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免ル、コトヲ許ストキハ差押ヘタル金錢又ハ差押ヘタル物件ノ賣得金ヲ供託セシム(日、五一三參照)

第六百六十條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ執行判決ヲ以テ之ヲ許スコトヲ言渡シタルトキニ限り之ヲ爲ス

其言渡ヲ求ル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第二十四條ニ從ヒ債務者ニ對シテ起スコトヲ得ル區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄ス

第五百十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ツ假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百十條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

第二審ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
第五百十二條 假執行ノ宣言ヲ付シタル判決ニ對シテ故障ヲ申立テ又ハ上訴ヲ起シタルキハ第五百條ノ規定ヲ準用ス

第五百十三條 本編ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ立ツルノ義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ

保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ得(獨、六五九參照)

保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタルコトニ付テハ求ニ因リ證明書ヲ付與ス可シ

第五百十四條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタルキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

執行判決ヲ求ムルノ訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第七條ノ規定ニ從ヒ債務者ニ對スル訴ヲ管轄

第六百六十一條 執行判決ハ裁判ノ適法ナル
ヤ否ヲ調査スルコトナクシテ之ヲ爲ス
其判決ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ爲スコトヲ
得ヌ

- 第一 外國裁判所ノ判決カ其裁判所ニ現
行ノ法律ニ從ヒ未タ確定セザリシトキ
- 第二 強制執行ノ許否ヲ判決スル獨逸國
判事カ法律ニ依リ強制スルコトヲ許サ
レサル行爲ヲ其執行ニ依リテ強行セシ
ムルニ至ルトキ

第三 強制執行ノ許否ヲ判決スル獨逸國
判事ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所ノ屬ス
ル國ノ裁判所カ管轄權ヲ有セザリシトキ

第四 敗訴ノ言渡ヲ受ケタル債務者カ獨
逸人ニシテ辯論應訴セザリシトキ但訴
訟ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受訴裁判
所々屬ノ國ニ於テ又ハ法律上ノ共助ニ
依リ獨逸國ニ於テ本人ニ送達セザリシ
トキニ限ル

第五 相互ヲ保セサルトキ
第六百六十二條 強制執行ハ執行文ヲ付シタ
ル判決ノ正本〔執行力アル正本〕ニ基キ之ヲ
爲ス

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ裁判所書
記之ヲ付與ス訴訟カ上級裁判所ニ屬スル
トキハ其裁判所ノ裁判所書記之ヲ付與ス

スル裁判所之ヲ管轄ス

第五百十五條 執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査
セシテ之ヲ爲ス可シ
執行判決ヲ求ムルノ訴ハ左ノ場合ニ於テハ
之ヲ却下ス可シ

- 第一 外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リス
ルコトヲ證明セサルトキ
- 第二 本邦ノ法律ニ依リ強テ爲サシムル
コトヲ得サル行爲ヲ執行セシム可キトキ
- 第三 本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ
管轄權ヲ有セサルトキ

第四 敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セ
ザリシトキ但訴訟ヲ開始スル呼出又ハ命
令ヲ受訴裁判所所屬ノ國ニ於テ又ハ法

律上ノ共助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送
達セザリシトキニ限ル

第五 國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルトキ

第五百十六條 強制執行ハ執行文ヲ付シタル
判決ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴
訟カ上級裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所ノ
書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムルノ申立ハ口頭ヲ以
テ之ヲ爲スコトヲ得

第六百六十三條 執行文ハ左ノ文面ヲ判決ノ正本ノ末尾ニ附記シ裁判所書記之レニ署名シ及ヒ裁判所ノ印ヲ押ス

此正本ハ某ニ〔當事者ノ表示〕強制執行ノ爲メ之ヲ付與ス

第六百六十四條 判決ノ旨趣ニ依リ執行カ債權者ノ義務ニ屬スル保證ヲ立ルコト以外ノ事實ニシテ債權者ノ證ス可キ事實ノ到來ニ繫ル判決ニ付テハ公正證書ヲ以テ證據ヲ舉ルトキニ限り執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ許ス

第五百十七條 執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス

其文式左ノ如シ

前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強制執行ノ爲メ原告某若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ

第五百十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルキ又ハ假執行ノ宣言アリタルキニ限り之ヲ付與ス

判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ保證ヲ立ツルコトニ繫ル場合ノ外他ノ條件ニ繫ル場合ニ於テハ債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコトヲ證スルキニ限り執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ得

第五百十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲メニ之ヲ付與シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スルキニ限ル

其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルキハ之ヲ執行文ニ記載ス可シ

第六百六十五條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ノ爲メ并ニ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人及ヒ第二百三十六條第二百三十八條ニ照ラシテ債務者ノ承繼人タル可キ者ニシテ訴訟物ヲ權利拘束中若シハ訴訟終結後買受ケタル者ニ對シ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキ又ハ公正證書ヲ以テ之ヲ證スルトキニ限ル

承繼カ裁判所ニ明白ナルトキハ之ヲ執行文ニ記載ス

第六百六十六條 第六百六十四條第六百六十

第五百二十條 第五百十八條第二項及ヒ第五

五條ノ場合ニ於テ執行力アル正本ハ裁判所長ノ命アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ許ス

裁判前ニ債務者ヲ審訊スルコトヲ得
其命ハ執行文ニ之ヲ記載ス

第六百六十七條 第六百六十四條第六百六十

五條ニ從ヒ必要ナル證明ヲ公正證書ヲ以テ爲スコト能ハサルトキハ原告ハ判決ニ基キ第一審ノ受訴裁判所ニ執行文ノ付與ニ付キ訴ヲ起ス

第六百六十八條 執行文ノ付與ニ關スル債務者ノ異議ニ付テハ執行文ヲ付與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス其裁判ハ

豫メ口頭上辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ其裁判前假ノ命令ヲ發スルコトヲ得殊ニ保證ヲ立シメ若シハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ一時停止スヘキコト又ハ保證ヲ立テシメスシテ續行ス可キコトヲ命スルコトヲ得

第六百六十九條 再度以上請求スル執行力アル正本ハ最初ニ付與シタル正本ヲ返還セサルトキハ裁判長ノ命アルトキニ限り同一ノ當事者ニ之ヲ付與スルコトヲ許ス
裁判前債務者ヲ審訊スルコトヲ得
裁判所書記ハ再度以上ノ正本ノ付與ヲ命スル裁判ノ旨渡ナキトキハ相手方ニ其付與ヲ

百十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得
右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

第五百二十一條 第五百十八條第二項及ヒ第

五百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルキハ債權者ハ判決ニ基キ執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得

第五百二十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ異議ヲ申立テタルキハ其執行文ヲ付與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス

裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保證ヲ立テシメ若シハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得

第五百二十三條 債權者カ執行力アル正本ノ數通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタル正本ヲ返還セシメシテ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムルキハ裁判長ノ命令アルキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得
裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得

通知セサル可ラス

再度以上ノ正本ニハ裁判ヲ記載シテ其旨ヲ明記ス

第六百七十條 執行力アル正本ノ付與前ニ當事者孰レノ一方ノ爲メ及ヒ何レノ時ニ於テ其正本ヲ付與シタルヤヲ判決ノ原本ニ記載ス

相手方ヲ審訊セスシテ執行力アル正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルキハ其旨ヲ相手方ニ通知ス可シ

正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルキハ其旨ヲ明記ス可シ

第五百二十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲メニ之ヲ與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ

第五百二十五條 執行力アル正本ノ効力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本邦ノ裁判區域内ニ及フモノトス

第五百二十六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辯濟ヲ得ル能ハサルキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲スノ權利ヲ有ス

第五百二十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

第五百二十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルキニ限り之ヲ始ムルヲ得

判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ繫ルキ又ハ判決ノ執行カ

第六百七十一條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及

ヒ之ヲ受クル者ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ指名シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルキニ限り之ヲ始ルコトヲ許ス判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ繫ルトキ又ハ判決ノ執行カ判決ニ來示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ

爲シ若クハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行スヘキ判決ノ外亦之ニ附記スル執行文及ヒ公正證書ニ基キ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ謄本ヲ強制執行ヲ始ムル前又ハ之ヲ始ムルト同時ニ送達スルコトヲ要ス

第六百七十二條 請求ノ主張カ曆日ノ到來ニ際ルトキハ強制執行ハ其曆日ノ滿了シタルトキニ限り之ヲ始ムルコトヲ得

執行カ債權者ノ義務ニ屬スル保證ヲ立ツルコトニ際ルトキハ公正證書ヲ以テ其保證ヲ立テタルコトヲ證明シ且其證書ノ謄本ヲ既

ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルトキニ限り其執行ヲ始ムルコトヲ得

第六百七十三條 現役ノ陸軍又ハ現役ノ海軍々人軍屬ニ對シテハ其上班軍事官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限り強制執行ヲ始ムルコトヲ得

求ニ因リ軍事官廳ハ其通知ヲ受取リタルコトノ證書ヲ債權者ノ爲ニ作ラサル可ラス
第六百七十四條 強制執行ハ裁判所ニ任カセサルトキニ限り債權者ノ委任ヲ受ケテ爲スヘキ執達吏之ヲ爲ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スルコトニ付キ裁判所書記ノ補助ヲ請求スルコトヲ得裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シ

判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲メニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス
若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ謄本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條 請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ際ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限り強制執行ヲ始ムルコトヲ得

若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ際ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其謄本ヲ既ニ送達

シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り其執行ヲ始ムルコトヲ得

第五百三十條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限り之ヲ始ムルコトヲ得

其官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ
第五百三十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限り執達吏之ヲ實施ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲メニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得
裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

タルモノト看做ス

第六百七十五條 執行力アル正本ノ交付ト共

ニ強制執行ヲ書面又ハ口頭ヲ以テ委任シタルトキハ執達吏カ支拂其他ノ給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有効ニ受取ノ證書ヲ作り且債務者カ其義務ヲ履行シタルトキハ之ニ執行力アル正本ヲ交付スルコトヲ委任シタル者トス

第六百七十六條 執達吏ハ執行力アル正本ノ

占有ニ依リ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ第六百七十五條ニ掲ケタル行為ヲ實施スルコトヲ委任セラル債權者ハ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ此等ノ者ニ對シテ主張スルコトヲ得ス

第六百七十七條 執達吏ハ給付ヲ受取リタル

後債務者ニ執行力アル正本及ヒ受取ノ證書ヲ交付シ其一部ノ給付ニ在テハ之ヲ執行力アル正本ニ附記シ且債務者ニ受取ノ證書ヲ交付ス
債務者カ後ニ債權者ノ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ此規定ノ爲メ變更ヲ受ルコトナシ

第六百七十八條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナ

リトスルトキニ限り債務者ノ住居及ヒ納屋

第五百三十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因

テ爲ス行為及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタルキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百三十三條 債權者執行力アル正本ヲ交

付シテ強制執行ヲ委任シタルキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有効ニ受取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ交付スルコトヲ得

第五百三十四條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ

所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行為ヲ實施スルノ權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス
執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルキハ其資格ヲ證スル爲メニ之ヲ示ス可シ

第五百三十五條 執達吏ハ債務者カ其義務ヲ

完全ニ盡シタルキハ執行力アル正本及ヒ受取ノ證書之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタルキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取ノ證ヲ債務者ニ交付ス可シ
債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムルノ權利ハ前項ノ規定ニ因テ妨ケラレルルニ無シ

第五百三十六條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナ

ル場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐

(物置)ヲ搜索スル權利ヲ有ス

執達吏ハ閉鎖シタル戸扉室扉及ヒ納屋ヲ開

カシムル權利ヲ有ス

執達吏ハ抵抗ヲ受ルトキハ威力ヲ用ニル權

利ヲ有シ且之ヲ爲メ警察權ノ執行機關ノ援

助ヲ求ムルコトヲ得軍事上ノ援助ヲ要スル

トキハ之ヲ執行裁判所ニ申立テサル可ラス

第六百七十九條 強制執行行爲ノ際抵抗ヲ受

クルキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ爲ス執行行

爲ノ際債務者又ハ成長シタル其家族又ハ其

家族ニ於テ雇使セラル、成長シタル者不在

ナルトキハ執達吏ハ成丁者二人又ハ市町村

吏若クハ警察官吏一人ヲ證人トシテ立會ハ

シム

匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ

開カシムルノ權利ヲ有ス

抵抗ヲ場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用井且

警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要

スルキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ

第五百三十七條 執達吏ハ執行行爲ヲ爲スニ

際シ抵抗ヲ受クルキ又ハ債務者ノ住居ニ於

テ執行行爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シ

タル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルキハ成

丁者二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人

ヲ證人トシテ立會ハシム可シ

第六百八十條 執行手續ノ際之ニ關與シタル

各人ニハ其求メニヨリ執達吏ノ記録ノ閱覽

ヲ許シ及ヒ各記録ノ謄本ヲ付與スルコトヲ

要ス

第六百八十一條 夜間並ニ日曜日及ヒ一般ノ

祭日ニハ執行行爲ヲ爲スヘキ地ヲ管轄スル

區裁判所判事ノ許可アルトキニ限り執行行

爲ヲ爲スコトヲ得

許可ヲ與フル命令ハ強制執行ノ際之ヲ示サ

ハル可ラス

夜間トハ四月一日ヨリ九月三十日ニ至ルマ

テハ午後九時ヨリ朝四時マテノ時間ヲ云ヒ

十月一日ヨリ三月三十一日マテハ晚九時ヨ

リ朝六時マテノ時間ヲ云フ

第五百三十八條 強制執行ニ付キ利害ノ關係

ヲ有スル各人ニハ其求メニ依リ執達吏ノ記録

ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存スル書類ノ謄

本ヲ付與スルコトヲ要ス

第五百三十九條 夜間及ヒ日曜日並ニ一般ノ

祝祭日ニハ執行裁判所ノ許可アルキニ限り

執行行爲ヲ爲スコトヲ得

右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示スコシ

第六百八十二條 執達吏ハ各執行行為ニ付キ
調書ヲ作ラサル可ラス

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作リタル場所及ヒ時

第二 執行行為ノ目的物及ヒ重要ナル事

情ノ略記

第三 執行ニ與カリタル人ノ表示

第四 右ノ人ノ署名及ヒ豫メ讀聞セタル

後又ハ閱覽ノ爲メ示シタル後及ヒ豫メ

承諾アリタル後其署名ヲ爲シタルコト

ノ開示

第五 執達吏ノ署名

第四ニ掲ゲタル要件ノ一ヲ具備スルコト能

ハサルトキハ其理由ヲ記載ス

第五百四十條 執達吏ハ各執行行為ニ付キ調

書ヲ作ル可シ

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作リタル場所、年月日

第二 執行行為ノ目的物及ヒ其重要ナル

情況ノ略記

第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示

第四 右各人ノ署名捺印

第五 調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閱覽セ

シメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコト

ノ開示

第六 執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スル能ハサ

ルルトキハ理由ヲ記載ス可シ

第六百八十三條 執行行為ニ屬スル催告其他

ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且完全

ニ之ヲ調書ニ記載セサル可ラヌ口頭ヲ以テ

之ヲ爲スコト能ハサルトキハ第五百五十八條

第六百六十六條乃至第七十條ノ規定ヲ準用

シテ調書ノ謄本ヲ送達シ又ハ催告若クハ通

知ヲ受ク可キ人ニ強制執行ノ場所ニ於テ送

達スルコト能ハサルトキハ郵便ヲ以テ送達

ス此規定ヲ遵守シタルトキハ之ヲ調書ニ記

載ス公示送達ハ之ヲ爲サス

第五百四十一條 執行行為ニ屬スル催告其他

ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書

ニ之ヲ記載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス能ハサ

ルルハ第三百三十九條、第四百十條及ヒ第百

四十五條乃至第四百九條ノ規定ヲ準用シ

テ其調書ノ謄本ヲ送達シ又別ニ送達證ヲ作

ラサルルハ調書ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記

載ス可シ

若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管

轄内ニ於テモ送達ヲ爲ス能ハサルルハ催告

又ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ

謄本ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調

書ニ記載ス可シ

第六百八十四條 裁判所ニ任セタル強制行為ノ命及ヒ其行為ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス

法律ニ他ノ區裁判所ヲ掲ケサルトキハ執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ執行裁判所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判ハ豫メ口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得

第六百八十五條 強制執行ノ方法又ハ其執行ノ際執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立

異議及ヒ督責ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス執行裁判所ハ第六百六十八條第二項ニ掲ケタル命ヲ發スル權利ヲ有ス

執行裁判所ハ執達吏カ執行委任ヲ受ルコトヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行行為ヲ實施スルコトヲ拒ムトキ又ハ執達吏ノ計算セシ費用ニ付キ督責ヲナストキモ亦裁判ヲ爲ス權利ヲ有ス

第六百八十六條 判決ニ因リテ確定シタル請求ニ關スル異議ハ債務者ヨリ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張セサル可ラス

右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クモ之ヲ主張スルコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ始メテ其憑據トナル原因ヲ生シ且故障ヲ

第五百四十二條 執行行為ノ際債務者ニ爲ス可キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カナラサルキ又ハ外國ニ在ルキハ之ヲ必要トセス

第五百四十三條 此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行為ノ處分又ハ其行為ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス

法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各箇ノ場合ニ於テハ執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百四十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ノ際シ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立

及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スルノ權利ヲ有ス

執達吏カ執行委任ヲ受ルルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行行為ヲ實施スルヲ拒ミタルキ又ハ執達吏ノ計算セシ手数料ニ付キ異議アルキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スルノ權利ヲ有ス

第五百四十五條 判決ニ因テ確定シタル請求ニ關スル債務者ノ異議ハ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張ス可シ

右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クモ異議ヲ主張スルコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコト

以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルトキニ限リ之ヲ許ス

債務者ハ訴ヲ起ス際主張スルコトヲ得タリ

シ總テノ異議ヲ其起スヘキ訴ニ於テ主張ス

ルコトヲ要ス

第六百八十七條 第六百八十六條第一項第三

項ノ規定ハ第六百六十四條第六百六十五條

ノ場合ニ於テ債務者カ執行文付與ノ際證明

シタリト認メラレタルモノニシテ即チ判決

カ其執行ヲ爲スノ條件ト爲シタル事實ノ到

來又ハ成就シタリト認メラレタル承繼ヲ爭

フトキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第六

百六十八條ニ從ヒ執行文ノ許否ニ對シ異議

ヲ申立ツル債務者ノ權利ハ之カ爲メニ變更

ヲ受ルコトナシ

第六百八十八條 受訴裁判所ハ申立ニ因リ第

六百六十八條第六百八十六條ニ掲ケタル異

議ニ付テ判決ヲ言渡スマテ保證ヲ立テシメ

若クハ保證ヲ立テシメシテ強制執行ヲ停

止スルコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ其

爲シタル執行處分ヲ取消ス可キコトヲ命ス

ルコトヲ得其申立ノ原因トナル事實上ノ主

張ハ之ヲ疏明セサル可シ

急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁

所ノ裁判ヲ提出スヘキ期間ヲ定メテ右ノ命

ヲ發スルコトヲ得此期間カ空ク滿了シタル

後ハ強制執行ヲ續行ス

此申立ニ付テノ裁判ハ豫メ口頭辯論ヲ經ス

ヲ得サルキニ限リ之ヲ許ス

債務者カ數箇ノ異議ヲ有スルキハ同時ニ之

ヲ主張スルコトヲ要ス

第五百四十六條 前條ノ規定ハ第五百十八條

第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テ債務

者カ執行文付與ノ際證明シタリト認メラレ

タル事實ノ到來ニシテ此ニ因リ判決ノ執行

ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭ヒ又ハ認メラレタル

承繼ヲ爭フキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於

テ第五百二十二條ノ規定ニ從ヒ執行文ノ付

與ニ對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權利ハ此カ

爲メニ妨ケラレルコト無シ

第五百四十七條 強制執行ノ續行ハ前二條ノ

場合ニ於ケル異議ノ訴ノ提起ニ因テ妨ケラ

レルコト無シ

然レモ異議ノ爲メ主張シタル情況カ法律上

理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疏明ア

リタルキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ

爲スニ至ルマテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ

立テシメシテ強制執行ヲ停止ス可キヲ命

シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス

可キヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證

ヲ立テシメテ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又急

迫ナル場合ニ於テハ裁判長之ヲ爲スコトヲ得

シテ之ヲ爲スコトヲ得

急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行使スルコトヲ得此場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲メニ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過シタルキハ債權者ノ申立ニ因リ強制執行ヲ續行ス

第六百八十九條 受訴裁判所ハ異議ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ變更シ又ハ認可スルコトヲ得此裁判ニ對スル不服ニ付テハ第六百五十六條ヲ規定ヲ準用ス

第五百四十八條 受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若クハ之ヲ認可スルコトヲ得
判決中前項ニ掲ケル事項ニ限リ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲スコシ
右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス

第六百九十條 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ讓渡ヲ妨クル權利アルコトヲ主張スルトキハ強制執行ニ對スル異議ハ執行ヲ爲ス地ヲ管轄スル裁判所ニ訴テ以テ之ヲ主張ス
右訴ヲ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同訟訴人ト看做ス
強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行ノ處分ノ取消ニ付テハ第六百八十八條第六百八十九條ノ規定ヲ準用ス執行處分ノ取消ハ保證ヲ立テサルトキニモ亦之ヲ許ス

第五百四十九條 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨クルノ權利ヲ主張スルキハ訴テ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセサルキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張スコシ
右訴ヲ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同被告ト爲ス
右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス
強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分

第六百九十一條 強制執行ハ左ノ場合ニ於テ
ハ之ヲ停止シ又ハ制限ス

第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ
取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ
宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記
載シタル執行力アル裁判ノ正本ヲ提出
スルトキ

第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ
命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本ヲ
提出スルトキ

第三 執行ヲ免カル、爲メ許シタル保證

ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シ
タル公正證書ヲ提出スルトキ

第四 執行ス可キ判決ノ言渡後ニ債權者
カ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承
諾シタル旨ヲ記載シタル公正證書又ハ
債權者ノ交付シタル私署證書ヲ提出ス
ルトキ

第五 判決ノ言渡後ニ債權者ニ辨濟スル
ニ必要ナル額ヲ之ニ支拂フ爲メ郵便局
ニ拂込ミタル旨ヲ記載シタル郵便受取
證ヲ提出スルトキ

第六百九十二條 第六百九十一條第一第三ノ
場合ニ於テハ同時ニ既ニ爲シタル執行處分
ヲ取消ス第四第五ノ場合ニ於テハ其處分ハ

ノ取消ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百
四十八條ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消
ハ保證ヲ立テシメスシテ之ヲ爲ストヲ得

第五百五十條 強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シ
タル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス
可シ

第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ
取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ
宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記
載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ
命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本

第三 執行ヲ免カル、爲メ保證ヲ立テ又
ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正

ノ證明書

第四 執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨
濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シ
タル旨ヲ記載シタル證書

第五百五十一條 前條第一號及ヒ第三號ノ場
合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消
ス可シ第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル

一時之ヲ保持ス第二ノ場合ニ於テ其裁判ヲ以テ從來ノ執行行為ノ取消ヲモ命セザリシトキニ限り亦同シ

第六百九十三條 債務者死亡ノ際既ニ之ニ對シテ開始シタル強制執行ハ其遺産ニ對シ之ヲ續行ス

執行行為ノ際債務者ノ立會ヲ要スルトキ遺産ニ相續ナク又ハ相續人若クハ其現在地ノ明カナラサルトキハ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ一時特別代理人ヲ任ス

第六百九十四條 債務者強制執行ノ開始前ニ死亡シタルトキ未ダ遺産ニ相續人ナク又ハ

相續人若クハ其現在地ノ明カナラサルトキハ各邦法律ニ依リ管轄ヲ有スル遺産裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ管財人ヲ任ス

第六百九十五條 債務者ノ相續人トシテ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル被告ハ財産目録ノ法律上特遇ヲ主張スルコトヲ得但被告ノ爲メ判決ニ於テ其特遇ヲ留保シタルトキニ限ル

第六百九十六條 特遇相續人又ハ財産目録ノ法律上特遇ヲ留保セラレタル相續人トシテ敗訴シタル債務者ニ對シ又ハ敗訴シタル債務者ノ相續人トシテ強制執行ヲ開始セラレタル債務者ニ對スル強制執行ニ方リテハ法律上特遇ニ基キ強制執行ニ對シ相續人ヨリ

執行處分ヲ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行為ノ取消ヲ命セサルキニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ

第五百五十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルキハ強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行ス可シ

債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行為ヲ實施スル場合ニ於テ相續人アラサルキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルキハ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任ス可シ

第五百五十三條 強制執行ノ開始後ニ戸主タル債務者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタ

ルキハ此變更ノ生セシ當時債務者ノ所持シタル財産ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス

異議ヲ申立ツルマテハ其特遇ハ採用セラレ
ヌ

特遇相續人カ法律上特遇ニ基キ強制執行ノ
中止、取消又ハ制限ヲ求ル權利ノ程度ハ民
法ノ規定ニ從テ之ヲ定ム

異議ノ完結ハ第六百八十六條第六百八十八
條第六百八十九條ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

第六百九十七條 強制執行ノ費用ハ必要ナリ
シ部分ニ限り〔第八十七條〕債務者ノ負擔ニ
歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時
ニ之ヲ取立ツ

強制執行ノ費用ハ執行ノ基本ナル判決ヲ廢
棄若クハ破毀スルトキハ之ヲ債務者ニ辨濟
セサル可ラス

第六百九十八條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必
要トスルトキハ裁判所ハ官廳ニ其援助ヲ求
ム

第六百九十九條 現役ノ陸軍又ハ海軍ノ軍人
ニ對シ兵營其他ノ軍用廳舎又ハ軍艦ニ於
テ強制執行ヲ爲スヘキトキハ執行裁判所ハ
債權者ノ申立ニ因リ管轄軍事廳ニ強制執行
ヲ囑託ス
差押ヘタル物件ハ債權者ノ委任スヘキ執達
吏ニ之ヲ交付ス

第七百條 法律上ノ共助ニ依リ獨逸裁判所ノ
判決ヲ執行スル官廳ノ屬スル外國ニ於テ強
制執行ヲ爲スヘキトキハ第一審ノ受訴裁判

第五百五十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリ
シ部分ニ限り債務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ
強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之ヲ取立ツ
可シ

強制執行ノ基本ナル判決ヲ廢棄若クハ破毀
シタルキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可
シ

第五百五十五條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必
要トスルキハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ求
ム可シ

第五百五十六條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサ
ル軍人、軍屬ニ對シ兵營及ヒ軍用廳舎又
ハ軍艦ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キキハ債權
者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ管轄ノ軍事裁
判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之
ヲ爲ス
囑託ニ因リ差押ヘタル物ハ債權者ノ委任シ
タル執達吏ニ之ヲ交付ス可シ

第五百五十七條 外國ニ於テ強制執行ヲ爲ス
可キ場合ニ於テ其外國官廳カ本邦裁判所ニ
法律上ノ共助ヲ爲ス可キキハ債權者ノ申立

所ハ債權者ノ申立ニ依リ外國ノ管轄官廳ニ
強制執行ヲ囑託ス

獨逸領事ニ依リ執行ヲ爲スコトヲ得ルトキ
ハ其領事ニ囑託ヲ爲ス

第七百一條 強制執行手續ニ於テ豫メ口頭辯
論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ル裁判ニ對シテ
ハ即時抗告ヲ許ス

第七百二條 其他強制執行ハ左ノ場合ニ於テ
之ヲ爲ス

第一 訴ノ提起後訴訟落着ノ爲メ其訴訟
ノ全部又ハ訴訟物ノ一分ニ付キ獨逸裁

判所ニ於テ取結ヒタル和解

第二 第四百七十一條ノ場合ニ於テ區裁

判所ニ於テ取結ヒタル和解

第三 抗告ノ上訴ヲ爲スコトヲ得ル裁判

第四 執行命令

第五 獨逸裁判所又ハ獨逸公證人カ其權

限内ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作りタル
證書但一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替
物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付
ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ證書ヲ作
リ且債務者カ其證書ニ依リ即時強制執
行ヲ受ク可キモノタルトキニ限ル

第七百三條 前條ニ掲ケタル債務名義ヨリ出

テタル強制執行ニハ第六百六十二條乃至第
七百一條ノ規定ヲ準用ス但第七百四條第七

ニ因リ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ外國官廳
ニ囑託ス可シ

外國駐在ノ本邦領事ニ依リ強制執行ヲ爲シ
得ヘキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ其領
事ニ囑託ス可シ

第五百五十八條 強制執行ノ手續ニ於テ口頭
辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ル裁判ニ對シテ
ハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五百五十九條 強制執行ハ左ノ諸件ニ付テ
モ亦之ヲ爲スコトヲ得

第一 抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコ
トヲ得ル裁判

第二 執行命令

第三 訴ノ提起後受訴裁判所ニ於テ又ハ

受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ
爲シタル和解

第四 第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁

判所ニ於テ爲シタル和解

第五 公證人カ其權限内ニ於テ成規ノ方
式ニ依リ作りタル證書但一定ノ金額ノ
支拂又ハ他ノ代替物若クハ有價證券ノ
一定ノ數量ノ給付ヲ以テ目的トスル請
求ニ付キ作りタル證書ニシテ直チニ強
制執行ヲ受ク可キ旨ヲ記載シタルモノ
ニ限ル

第五百六十條 前條ニ掲ケタル債務名義ニ因

レル強制執行ニハ第五百十六條乃至第五
百五十八條ノ規定ヲ準用ス但第五百六十一條

百五條ニ於テ之ト異ナル規定ヲ掲ケサルト
キニ限ル

第七百四條 執行命令ニハ其命令ヲ發シタル
後債權者ハ債務者ニ於テ承繼アリタル場合
ニ限り執行文ヲ要ス

請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生
シタル原因ニ基クトキニ限り之ヲ許ス
執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關スル異
議ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際到來シ
タリト認メタル承繼ヲ爭フ訴ハ執行命令ヲ
發シタル區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區
裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ訴ヲ其管轄
地方裁判所ニ起ス

第七百五條 裁判所ノ文書ノ執行力アル正本

ハ其證書ヲ作りタル裁判所書記之ヲ付與ス
公證人ノ作りタル證書ノ執行力アル正本ハ
其證書ヲ保存スル公證人之ヲ付與ス其證書
カ官廳ノ保存中ニ在ルトキハ其官廳ハ執行
力アル正本ヲ與付ス執行文ノ許否ニ關スル
異議ニ付テノ裁判及ヒ再度ノ執行文付與ニ
付テノ裁判ハ裁判所ノ證書ニ在リテハ第一
項ニ掲ケタル裁判所之ヲ爲シ公證人ノ證書
ニ在リテハ第二項ニ掲ケタル公證人ノ役場
又ハ第二項ニ掲ケタル官廳ノ所在地ヲ管轄
スル區裁判所之ヲ爲ス
請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第六百八
十六條第二項ノ制限ヲ適用セス
執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關スル異

第五百六十二條ノ規定ニ依リ差異ノ生スル
ルハ此限ニ在ラス

第五百六十一條 執行命令ニハ其命令ヲ發シ
タル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場
合ニ限り執行文ヲ附記スルヲ要ス
請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生
シタル原因ニ基クトキニ限り之ヲ許ス
執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議
ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際到來シタ
リト認メタル承繼ヲ爭フ訴ハ執行命令ヲ發
シタル區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區裁
判所ノ管轄ニ屬セサルモノナルルハ管轄地
方裁判所ニ其訴ヲ起ス可シ

第五百六十二條 公證人ノ作りタル證書ノ執
行力アル正本ハ其證書ヲ保存スル公證人之
ヲ付與ス
執行文付與ニ關スル異議ニ付テノ裁判及ヒ
更ニ執行文付與ニ付テノ裁判ハ公證人職務
上ノ住所ヲ有スル地ヲ管轄スル區裁判所ニ
於テ之ヲ爲ス
請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第五百四
十五條第二項ニ規定シタル制限ニ從ハス
執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議
ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際證明シタ
リト認メタル事實ノ到來ニ係リ此ニ因テ證
書ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭フ訴ハ債務

議ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際證明シ
タリト認メタル事實ノ到來即チ其執行カ證
書ニ因リテ爲シ得ヘキモノ(事實ノ到來)ヲ
争フ訴又ハ到來シタリト認メタル承繼ヲ争
フ訴ニ付テハ債務者カ獨逸國ニ於テ普通裁
判籍ヲ有スル裁判所又ハ此裁判所ナキトキ
ハ第二十四條ニ從ヒ債務者ニ對シ訴ヲ起ス
コトヲ得ル裁判所之ヲ管轄ス

第七百六條 各邦法律ハ第六百四十四條第七
百二條ニ掲ケタル以外ノ債務名義ニ基キ裁
判所ノ強制執行ヲ許スモ妨ケナシ且其許シ
タル範圍内ニ於テ此法律ノ強制執行ニ付テ
ノ規定ト異ナル規定ヲ設クルモ妨ナシ
前項ノ規定ハ書入質證書(書入質債務證書、

書入質證書等)ニモ亦之ヲ適用ス

第七百七條 本篇ニ定メタル裁判籍ハ專屬ナ
リトス

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第七百八條 動産ニ對スル強制執行ハ差押ヲ
以テ之ヲ爲ス強制執行ハ債權者ニ辨濟スル
爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲ニ必要ナ
ルモノ、外ニ及ホスコトヲ許サス
差押フ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用
ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ差押ヲ
行ハス

第七百九條 債權者ハ差押ニ依リ差押ヘタル

者カ本邦ニ於テ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁
判所又ハ此裁判所ナキトキハ第十七條ノ規定
ニ從ヒ債務者ニ對シ訴ヲ起シ得ヘキ裁判所
之ヲ管轄ス

第五百六十三條 本編ニ定メタル裁判籍ハ專
屬ナリトス

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第五百六十四條 動産ニ對スル強制執行ハ差
押ヲ以テ之ヲ爲ス
差押ハ執行力アル正本ニ掲ケタル請求ヲ債
權者ニ辨濟スル爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ
償フ爲メニ必要ナルモノノ外ニ及ホスコトヲ
得ス
差押フ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用
ヲ償フテ剩餘ヲ得ルノ見込ナキトキハ強制執

物件ニ付キ質權ヲ得

此質權ハ債權者ト他ノ債權者トノ關係ニ於
テハ債權者ニ契約ニ依テ取得シタル動産質
權ト同一ノ權利ヲ與フ此質權ハ破産ノ場合
ニ於テ動産質權ト同視ス可カラサル質權及
ヒ優先權ニ先行ス
前差押ニ依テ生シタル質權ハ其後ノ差押ニ
依テ生シタル質權ニ先行ス

第七百十條 物件ヲ占有セサル第三者ハ質權
又ハ先取權ニ基キ物件ノ差押ニ對シ異議ヲ
申立ツルコトヲ得ス但第三者ハ要求期限ニ
至リタルト否トヲ問ハス訴ヲ以テ賣得金ヨ
リ最初ニ辨濟ヲ受ルノ請求ヲ爲スコトヲ得
訴ハ之ヲ執行裁判所ニ提起ス訴訟物カ區裁

行ヲ爲スコトヲ得ス

第五百六十五條 第三者カ差押ヲ受ク可キ物
ニ付キ物上ノ擔保權ヲ有スルモ差押ヲ妨ク
ルコトヲ得ス然レモ第五百四十九條ノ規定ニ
從ヒ訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先ノ辨濟ヲ請
求スルノ權利ハ此カ爲メニ妨ケラルルコト無
シ

判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ執行裁判所ノ

所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ提起ス

訴ヲ債權者及ヒ債務者ニ對シテ爲ストキハ
此等ノ者ハ之ヲ共同訴訟人ト看做ス
請求カ疏明セラル、トキハ裁判所ハ賣得金
ノ供託ヲ命ヌ第六百八十八條第六百八十九
條ノ規定ハ此場合ニ準用ス

第七百十一條 差押ヲ以テ債權者ニ十分ノ辨
濟ヲ爲スニ足ラサリシトキ又ハ債權者カ差
押ニ依リ自己ノ受クヘキ辨濟ヲ十分ニ得ル
能ハサルコトヲ疏明スルトキハ債務者ハ申
立ニ因リ其財産目錄ヲ提出シ其債權ニ關ス
ル理由及ヒ證據方法ヲ記載シ并ニ左ノ明告
宣誓ヲ爲スノ義務アリ

此場合ニ於テ請求ノ爲メ主張シタル情況カ

法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ
疏明アリタルキハ裁判所ハ賣得金ノ供託ヲ
命ヌ可シ但此事項ニ付テハ第五百四十七條
及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス

債務者ハ其財産ヲ悉皆記載シ故意ニ何事ヲモ黙秘セザリキ

第二款 有体動産ニ對スル強制執行

第七百十二條 債務者ノ占有中ニ在ル有体動産ノ差押ハ執達吏其物件ヲ占有シテ之ヲ爲ス

其物件ハ債權者ノ承諾アルトキ又ハ他ノ處分ヲ爲スニ付キ重大ノ困難アルトキニ限り之ヲ債務者ノ保管ニ任ス此場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルトキニ限り差押ノ効力ヲ生ス

執達吏ハ差押ヲ爲シタルコトヲ債務者ニ通知ス

第七百十三條 前諸條ノ規定ハ債權者又ハ提

出ノ意アル第三者ノ占有中ニ在ル物件ノ差押ニモ之ヲ準用ス

第七百十四條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フルコトヲ得其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一箇月ヨリ早ク之ヲ爲スコトヲ許サス

第七百十五條 左ノ物件ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一 衣服、寢具、家具、及ヒ廚具殊ニ煖爐及ヒ竈爐但此物件ヲ債務者其家族

第二款 有體動産ニ對スル強制執行

第五百六十六條 債務者ノ占有中ニ在ル有體動産ノ差押ハ執達吏其物ヲ占有シテ之ヲ爲ス

其物ハ債權者ノ承諾アルトキ又ハ其運搬ヲ爲スニ付キ重大ナル困難アルトキハ之ヲ債務者ノ保管ニ任スコシ此場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルトキニ限り其効力ヲ生ス

執達吏ハ債務者ニ其差押ヲ爲シタルコトヲ通知ス可シ

第五百六十七條 前條ノ規定ハ債權者又ハ物

ノ提出ヲ拒マサル第三者ノ占有中ニ在ル物ノ差押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百六十八條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フルコトヲ得然レモ其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一箇月内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

蠶ハ其多分カ繭ヲ成造スル爲メ揚リ蠶ト爲リタル後ニ非サレハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第五百六十九條 差押ノ効力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ産出物ニモ當然及フモノトス

第五百七十條 左ニ掲クル物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一 衣服、寢具、家具及ヒ廚具但此物カ債務者及ヒ其家族ノ爲メ缺ク可カラ

及ヒ雇人ノ爲メニ必要ナルトキニ限ル

第二 債務者其家族及ヒ其雇人ノ爲メニ週間必要ナル飲食物及ヒ火料

第三 乳牛一頭又ハ債務者ノ撰ニ依リ乳牛ノ代ニ山羊二頭又ハ綿羊二頭及ヒ其飼養若クハ廠敷ノ爲メニ週間必要ナル飼料及ヒ飼但此動物カ債務者其家族及ヒ雇人ノ醫養ノ爲メニ必要ナルトキニ限ル

第四 技術家、手職人、手細工人及ヒ製造所勞役者并ニ穩婆ニアリテハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可ラサル物件

第五 農業ヲ爲ス者ニ在リテハ農業ノ爲メ缺ク可ラサル器具、家畜及田野ノ目録及ヒ肥料并ニ次ノ收穫マテ農業ヲ續行スル爲メ缺ク可ラサル農産物

第六 將校、海軍下士官、官吏、僧侶、公立教育場教師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在リテハ其職務ヲ管理シ又ハ其職業ヲ執行スル爲メ必要ナル物件并ニ身分相當ノ衣服

第七 將校、軍醫、海軍下士官、官吏、僧侶、及ヒ公立教育場教師ニアリテハ差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ時間ニ於テ職務上ノ收入又ハ恩給ノ差押ヲ受ケサル部分ニ相當スル金額

第八 藥舖ノ營業ノ爲メ缺ク可ラサル器具容器及ヒ商品

具容器及ヒ商品

サルキニ限ル

第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一箇月間ノ食料及ヒ薪炭

第三 技術者、職工、勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル物

第四 農業者ニ在テハ其農業上缺ク可カラサル農具、家畜、肥料及ヒ次ノ收穫マテ農業ヲ續行スル爲メ缺ク可カラサル農産物

第五 文武ノ官吏、神職、僧侶、公立私立ノ教育場教師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可カラサル物並ニ身分相當ノ衣服

第六 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立

私立ノ教育場教師ニ在テハ第六百十八

條ニ規定スル職務上ノ收入又ハ恩給ノ

差押ヲ受ケサル金額但差押ヨリ次期ノ

俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ日數ニ應ジ

計算ス

第七 藥舖ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ缺ク

可カラサル器具及ヒ藥品

第八 勳章及ヒ名譽ノ證標

第九 實印其他職業ニ必要ナル印

第十 神體、佛像其他禮拜ノ用ニ供スル

物

第十一 系譜

第十二 債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセ

サル發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其

第九 勳賞及ヒ名譽ノ證標

第十 寺院又ハ學校ニ於テ債務者及ヒ其家族ノ使用ニ供スル書籍

家族ノ未ダ公ニセサル著述ノ稿本

第十三 債務者及ヒ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍

然レモ債務者ノ承諾アルキハ第三號乃至第八號ニ掲ケタル物ヲ除クノ外之ヲ差押フルコトヲ得

第五百七十一條 差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスルトキハ執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲ス可シ若シ此カ爲メニ費用ヲ要スルキハ債權者ヲシテ之ヲ豫納セシメ又債權者數名關係スルキハ其要求額ノ割合ニ從ヒ其各債權者ヨリ之ヲ豫納セシム可シ

第五百七十二條 執達吏ハ差押ヲ實施シタル後債權者又ハ裁判所ノ特別委任ヲ要セスシテ以下數條ノ規定ニ從ヒ公ノ競賣方法ヲ以テ其差押物ヲ賣却ス可シ

第五百七十三條 競賣ス可キ物ノ中ニ高價ノモノアルキハ執達吏ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲サシム可シ

第五百七十四條 差押金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡ス可シ

執達吏カ金錢ヲ取立テタルキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カルルコトヲ債務者ニ許シタルキハ此限ニ在ラス

第五百七十五條 差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ少ナクモ七日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス但差押債權者、執行力アル正本ニ因リ配當

シム

差押ヘタル金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡ス執達

吏ノ爲ス金錢ノ取立ハ債務者ヨリ支拂ヒタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免ル、コトヲ債務者ニ許サ、ルトキニ限ル

第七百十七條 差押ヘタル物件ノ競賣ハ差押

ノ日ヨリ一週ノ満了前ニハ之ヲ爲スコトヲ許サス但債權者及ヒ債務者カ此期限前ノ競

賣ニ付キ合意スルトキ又ハ競賣ス可キ物件ノ價格ヲ著シク減少スルノ危險ヲ防カンカ爲メ若シハ永ク貯藏スルニ因テ生スル不相當ノ費用ヲ避ルカ爲メ早ク競賣ヲ要セサルトキニ限ル

競賣ハ差押ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ付キ合意セサルトキニ限ル
競賣ノ日時及ヒ場所ハ競賣ス可キ物件ヲ一般ニ表示シテ公告ス

第七百十八條 最高價競買人ノ爲メノ競落ハ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス

競落シタル物件ノ引渡ハ現金支拂ト引換ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ許ス

最高價競買人公賣條件ニ定メタル期日又ハ其定ナキトキハ競賣期日ノ終ル前ニ代金支拂ニ引換ヘ引渡ヲ求メサルトキハ其物件ヲ更ニ競賣ス其最高價競買人ハ再ヒ競買ニ加ハルコトヲ許サス最高價競買人ハ賣得金ノ不足ヲ擔任スルモ増額ヲ請求スルコトヲ得ス

第七百十九條 競賣ハ賣得金ヲ以テ債權者ニ辦濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルトキハ直ニ之ヲ止ム

第七百二十條 執達吏ノ賣得金領收ハ債務者ノ支拂ト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲

ヲ要求スル債權者及ヒ債務者カ競賣ヲ更ニ早ク爲サシコトヲ合意シタルキ又ハ差押物ヲ永ク貯藏スルニ付キ不相應ノ費用若クハ其物ノ價格ノ著シク減少スル危害ヲ避ケン爲メ競賣ヲ早ク爲スコトヲ必要ナルキハ此限ニ在ラス

第五百七十六條 競賣ハ差押ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但差押債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ合意シタルキハ此限ニ在ラス
競賣ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告ス其公告ニハ競賣ス可キ物ヲ表示ス可シ

第五百七十七條 最高價競買ノ爲メノ競落ハ其價額ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス

競落物ノ引渡ハ代金ト引換ヘ之ヲ爲ス

最高價競買人競賣條件ニ定メタル支拂期日又ハ其定ナキキハ競賣期日ノ終ル前ニ代金ノ支拂ヲ爲シテ物ノ引渡ヲ求メサルキハ更ニ其物ヲ競賣ス可シ此場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競買ニ加ハルコトヲ得ス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キキハ不足ヲ擔任ス可シ其高キキハ剩餘ヲ請求スルコトヲ得ス

第五百七十八條 競賣ハ賣得金ヲ以テ債權者ニ辦濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ルキハ直ニ之ヲ止ム可シ

第五百七十九條 執達吏賣得金ヲ領收シタルキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做